DASH

14

13期 ～ 17期

栄光学園
蹴球部

もくじ

◆栄光学園 サッカー部 1964年度 …… 新倉正和 1

中学の主将として …… 14期 福田昭紀 3
ごくろうさまデシタ …… 13期 吉田伸一 4

◆全国大会

大阪への道 …… 13期 渡辺浩 7
エンセイジュンビ …… 13期 渡辺浩 11
全国大会（1回戦） …… 13
どこへ行こうだって大阪だぁ!! …… 13期 戸田 16
喫煙室 …… 19

◆関東大会 …… 14期 新倉正和 22

関東大会余談 …… 13期 青山

◆私は思う ＝ 朝日新聞より要約 …… 29

◆国体 神奈川県予選 …… 13期 太田忠彦 30

国体へ行かれない事 …… 13期 青山 33

◆神奈川県総合 （神奈川県総合体育大会） ……
…… 14期 福田昭紀 34

さっかぁぶ …… 36
15期ガンバレ …… 13期 渡辺幸男 37

◆中学夏の大会 …… 15期 吉田伸二 40
◆中学冬の大会 …… 15期 菅谷 41

練習試合あれこれ …… 44
サッカー部に入って …… 17期 中前裕 46
サッカー部を出るにあたって …… 12期 中川 47
タマゴ紹介 …… 49

◆昭和38年度 総合成績 …… 50

ニュース …… 52
トピックス …… 53 編集後記 …… 54

1964年度

栄光学園 サッカー部

創立十二年目
13期〜17期

新倉正和

我々十四期生が、市村さんや石原さん等9、10期生にあこがれて、このサッカー部のほこりっぽい部室に足をつっこんでから、三年半・早いものだ。サッカーのボールを蹴っていると、こうも早く年月が経ってしまう。今年一年をブラブラして無駄に部生活を過ごさないように部員一人一人しっかりとした目標を立てておこう。

サッカー部で一番大切なものーそれは関東大会全国大会出場でなければ、県大会の優勝カップでもない。今までのサッカー部で一番大事なものとして守られ続けてきたもの、それは部員間に溢れる明かるさと情熱的なファイトであると言っても過言でないと思う。

時々僕は中一の時からずっとそろえてきた「ダッシュ」を寝る前に読むのだが、大ていどれもユーモラスな記事で、何回読んでも思わずふき出してしまう。明かるさーそれは、今まで多くの先輩が築いてきてくれたサッカー部の大なる遺産である。部内にどんな問題が起きても、大きな失敗をしてしまった時でも、練習がつらくなっても、明かるさを失なわずにズンズン進んで行こう。部の雰囲気を明かるくすることによって、The family of soccer という伝統あることばも生きてくるのであり、我々がこれからつき当る数々の難問の解決が容易になり、サッカー部の生活が、楽しくもなり意義深いものになるのである。

またファイトと情熱は、サッカー部の生命である。試合の時はもちろん、練習中も、勉強において

も、部生活学園生活その他におけるあらゆる部面においても、それに対する溢れるような情熱とファイトでぶつかって、全力を出し切ろう。全力を出し切った後の壮快さ、満足感。一月の全国大会、上野高に敗けた時、試合後のチーム全員の顔は割合に明かるく、満足感に満ち、試合の思い出話がはずんだ。つまり、押され放しで遂に一対0で敗けはしたけれども、後で東郷、ウェバー両先生がおっしゃられたように栄光は、全員ファイトを持ち上野に対して堂々と戦ったのだ。悔いることがなかったのだ。

また、ファイトは試合の時だけに出せばよいものではない。練習の時も、練習外にボールを入れたり抜いたりする時も、ネットを張ったりラインを引いたりする時も、自分の係の仕事や他人を手伝う時にも、部生活あらゆる面でファイトを見せようではないか。そして、サッカーに対する情熱をばくくもう。(もちろん勉強に対しても)

最近、栄光の中学生の部活には自主性、積極性に欠けていると言われる。サッカー部では、今年中心になる14期生についてそういうことが言えるのではなかろうか。高二になれば、自分達で練習計画を立て、研究し、練習し、作戦を考えなければならない。自分達でうまくならなければならない。極端に言えば、頼れるのは自分だけである。自分が「やる気」を出して始めて、技術等も完成され、そこから団結、ファイト、心意気、情熱も生まれてくるのである。勝利にも、関東大会、全国大会にも、優カップにも通ずるのである。

今年は栄光が大船に移る年でもある。新しい部室、グランドを整のえなければならない。部員一人一人の仕事も多くなろう。部活が順調に行かず、嫌な仕事が多くなるかも知れない。しかしその時には、サッカー部草分け時代の先輩を思い出し、明かるさ、ファイト、団結、情熱を持ち続け、田浦の部室の床板にしみこむ11年間の伝統を維持し、弟達の石づえを築き、弟達に受け継いで行こう。「試合に敗れ、グランドに泣きくずれる時、精神的な技術的なスランプにおちいる時、その時にファイトを失なわないで欲しい。いつ来るか、わからない。しかし、必らず来る。その時に起き上って欲しい。」終

中学の主将として

十四期　福田昭紀

各部の新内閣の送挙が行われるようになると、「君達の部の主将は誰？」「会計は誰？」という会話が多くなるが、「副主将は？」などという気のきいた質問はほとんど例かない。このように、副主将のいない部はきわめて多い。しかし、この事は、他の部がサッカー部より小規模であり、中学生の指導にあまり重点を置いていないことを物語っていると思う。

来年度私は、中学の主将という位置につき、キャプテン新倉の相談役ともなって大いに活動しようと思う。中学の指導ということは部で最も重要な事の一つである。なぜなら、彼等は私達からバトンを受ける立場にあるからである。中学の今までの成績を見てみると、13Kが冬の大会に優勝していらい本大会での成績は、下降線をたどっている。今年度は中学が抬頭してこなければならない時期にあると思う。そして、この中学生の責任者になって、不安を持つ一方、大きな期待と中学生をしぼれるという喜びと楽しみとを持っている。直接は、佐藤と大橋との二人が、16K17Kの指導者であるが、二人と協力し、中学生をすべての面できたえあげ、みんなまとめてめんどうを見るつもりだ。土曜日以外の中学の練習には必らず参加すること、見に行ける試合はかかさず見にいくことを中学生諸君と約束しておこう。

私達14Kは実に幸福な一年間を送ることができた。夏は千葉へ、正月は大阪へと、未知の世界へ、安い金で旅することができた。しかし、関東大会、全国大会では善戦及ばず共に一回戦で敗退してしまった。試合をやって経験することができなかった一方、他チームの試合を見て感心させられることは数多くあった。これらをみな、中学生に教えることもできないだろうし、自分達自身で吸収することも困難であろう。しかし、それらの体験を少しでも生かして、県外のすばらしいチームに近づき、大会に出ても一回戦で負けるようなことがないように高校はがんばり、そして、中学は、県大会で好成績を残こすようがんばってもらいたい。FIGHTあるのみ。

ごくろうさまデータ！

13期
吉田伸一

新幹部の選考も終り、僕達13期も次の14期にバトンタッチする時が来た。思えば去年の一月キャップテンに送ばれてからの一年、14期の鼓舞、遠征の人数、中学の指導など勿論悩んだ事も数多くあったが、僕は、主将としてその何倍もの喜びを味わってきた。僕を支えた物は二つある。一つは先輩から伝わっているノートである。十年間の部歴が秘められた先輩達の汗の結晶、僕はつらい時よくそれをひもといた。その度に純粋なサッカー部への情熱にうたれ、又勇気をとり戻すのだった。もう一つは、今年の高校部員のファイトである。技術的な知識に乏しい僕は指導の際にも不安を抱いていた。この練習は効果があるか？こう教えてきたがそれで良いのか？　と又苦しいランニング、これらは、皆の従順とファイトによって征服された様に思われる。一年の経験で僕は断言できる。「練習ヲ真ニ効果アラシムルハ、主将ノ作セル計画ニアラズ、全部員ノ気力ニ存スルナリ。」と。

戦績については、新人戦優勝、関東大会予戦準優勝、国体予選優勝、全国大会予選優勝と県内においては無敵である。県外では勝てなかったものの、全国大会の上野高校との激戦は、一生の想い出となるだろう。心の和は技術を超越した力を出す事を身を以て感じたのもあの時だった。さてこの輝かしい戦績をもたらした物は何か。僕は四つを特筆したい。第一は言うまでもなく、全部員の努力である。第二は、高Ⅰのあと押であり第三は、佐藤さんら先輩の指導である。第四は気が付かないかも知れないが、13期が高Ⅰとして過した一年の経験である。なるほど12期の代は、いい所で負けた。何処かくすんだ一年だった。そして僕達が高Ⅱになって痛感した事は「伊東さん達に済まねえ。俺達高Ⅰが今位勝利に執着する気持があったなら。」と言う事だった。こ

の悔恨と「もうあのインター杯の様な苦い気持は味わいたくない」という決意は、強く僕達を支えていたと思う。

第二に僕は高Ⅰの力を挙げたがここには、15期以降の高Ⅰに立派な模範が示されている。高Ⅰの仕事は、個々に分担された係の仕事の外に全体として「ボール入れ」の大役がある。これがつらい仕事である。練習前には、高校12個、中学12個のボールに空気が入っていなければならない。週に一度は必ずやらねばならない。試験のある日も多い。しかし14期はボール係を中心によく働いた。朝授業開始25分も前に部室に来て、ボールを入れている光景は、もうあたりまえにさえ思われる程だった。高Ⅰのまとまった年は強い。15期生に忠告する。初めは、勝手もわからずガタ〳〵どなられるかも知れない。叱られて仕方なしにやる。こんな態度では一年という長い間耐える事は出来ない。自分から進んでやる心構えが必要であり、それは、部に於る自分達高Ⅰの重要性を認識する事から生ずる。つまりサッカー部員としての自分を自覚する事にあるのである。そして高Ⅰとしての修業が、高Ⅱとなった時、部の中心として活動する際の精神力を生み出すのである。

つらい事もあった。すぐ国体の事が頭に浮かぶ。夏の炎天下での一週間の練習と、決勝で鎌学を一点差で破るまでの試合につぎ込んだエネルギーがすべて空しかったのかと疑いもした。思えば年頭に僕が言った、「必ず、グランドに泣き崩れる様な時がくる。その時も力合わせて起き上ろう。」と、これがあの時ではなかったろうか。東郷先生の声が響く、「今が一番大切な時だ。ここで頑張らなくちゃいけない」。そして見事僕達はこの苦しみを越えた。「艱難汝を玉にする」。しかしキャップテンとして僕は事前に校長と話すべきだった。後で校長と話して、学校が非常に迷惑をうけた事、部長のつらい立場を見て済まなく思った。校長はおっしゃった。「広い視野から物を見なくてはいけない」。しかしこの対談によって僕は、部長と校長に対する信頼を深めた。僕はここで言いたい「部長と学校を信頼しよう」と。事実、上野戦の戦況を例いて讃美を惜しまない人々の姿はこれに確信を与えるものである。

最後に、太田、渡辺(浩)らの仕事に感謝する。彼等のサッカーと部に対する情熱は、靴棚、ボール台となり、遠征のマネージャーの仕事、ピエの発刊をなさしめた。体の都合でプレーは出来なかったがやはり、13期のサッカー部員として彼等は立派にその務めを果したと思う。中学も戦績こそパットしないが、例年に比べて力が落ちるとは思われない。サッカーの普及が大会出場校の激増を呼んだ事、夏の大会で抽選敗け、冬は準決勝で一中に一点差で敗れ、その一中が優勝した事など不運と言えば不運だった。しかし最大の敗因は「心のしまり」に欠けていた点ではないか。練習を見ていても、ピリッとした所がないのが心配だったが、それが大きく影響した様に思われてならない。今度君達も高校生になる。一つ言っておきたいのは「過ぎた事は気にするな。新しい気持で自ら進んで練習しろ。」という事である。

拙い文章でこれ以上続けると、思い出がこわれてしまいそうなので、ここで筆を置く。

このような幹部の交代を決めた主将送挙は、一月十一日高三Cの教室で、東郷先生立ち合いのもとで行なわれた。

その詳細は左の通り

主将　新倉正和

有効票数50中30獲得

副主将　福田昭紀

有効票数57中36獲得

会計　堀尾　泉

有効票数48中24獲得

また係は次のように決った。

グラウンド係　山本(務)　山本(裕)

ボール係　小菅

医療係　中瀬(スクラップも

ダッシュ係　赤沢、高垣、新井

美術係　笠木

連絡宣伝係　宮内、内村

ユニフォーム係　吉川

中三指導　佐藤、福田

中二指導　大橋

送挙後、新主将新倉君の格調高い演説が行われた。新主将は和製チャキリスの呼び声が高いが、一見鈍重なのが欠点といえば欠点か。Bオナス上位。内気。しかし、タムレを歌わせれば絶品。

全国大会

大阪への道

県予選

13期 渡辺 浩

ついに全国大会が始った。13期生にとっては最後の機会である。第一回戦はシードだった。一回戦の様子を見に行った村田の話によれば、慶応は10対0で勝ったとか。しかも巨人ぞろいだから特にマークしなければという。送手一同山口へ行った錬学の成長も気になったが大いにファイトを燃やし、黙々と練習にはげんだ。メンバーは次のようにきまった。

<栄光メンバー>
。名前の次の数字は期をあらわす。

GK	青戸(13)	吉川(14)
RF	青山(13)	
LF	戸田(13)	
RH	福田(14)	小菅(14)
CH	秋山(13)	
LH	相川(13)	小菅(14)
RW	渡辺(幸)(13)	
RI	佐藤(13)	
CF	村田(13)	
LI	吉田(13)	
LW	内村(14)	笠木(14)

▼第二回戦 (11月10日)

対緑ヶ丘 クレー

冷い風がかなり強いが晩秋の高い空はみごとに青い。鈴木中氏のホイッスルで待望の試合開始となった。栄光はまるで押しっぱなし。ボールはハーフラインを越えてもどることがない。「ああ、これはいただいた」と皆思ったのであろう。目のさめるようなシュートがポストすれすれに飛びさるばかりで点ははいらない。いくぶんあせりも見えだした24分、ついにゴールイン。村田の巧妙なドリブルから渡辺→吉田とまわっての得点である。一点はいればあとは楽だ。27分、佐藤敵バックから球を奪ってシュート。それをキーパーともつれながら村田がおしこんで二点目。35分、パスをぐるぐるまわし

ているうちにキーパーとび出し、それをかわして渡辺が右から急角度のシュート。3対0となったところでハーフタイムとなった。見ていた者は、3点では恥かしいと叱る。どちらが勝っているのだか解らないような口ぶりだ。

後半、栄光バックはひまだ。たまに栄光バックに球が渡るとヒャッとする。一種の苦戦か。もっともっととフォワードがあせるうちに試合終了となってしまった。栄光のシュート39本。緑ケ丘2本。緑ケ丘のゴールキック21本。栄光2本。

3
0 1 0　3 1 0
0

▼準々決勝（11月23日）

対茅ヶ崎　ローン

今朝ケネディ大統領が暗殺された。それとは全然関係ないが、京浜一帯はこい霧がでて列車は大混乱した。横浜方面から来た者の道程は、横浜→大船＝電車(満員)、大船→藤沢＝バス(満員)、藤沢→グラウンド＝徒歩＋トラック。所要時間は3時間。少し疲れた体でキックオフとなった。頑張れ!!

4分、敵R下シュートしようとする佐藤に足をかける。PKを得て、村田がなごやかにサイドで一点をいただいた。日光に芝生が美しいがその後どちらも点が入らない。ポーンポーンとボールが往来する。敵のエース首藤は完全にマークされて生彩がない。何ということもなく試合が進行し、やがてハーフタイムとなった。

キャプテン吉田「後半始まったらすぐ一点いれよう。」

後半、7分。渡辺長いドリブルで敵陣深く侵入しセンタリングする。佐藤ゴールのすみに蹴り込んで二点目をとった。茅ヶ崎はちょっと気おちしたようである。首藤が盛んに例の甲高い声をあげる。15分には佐藤が大きなロビングで一気にせめこんだ。村田すぐにキーパーの頭を越える山なりのシュート。三点目である。これで勝利は決定的となりそのまま終った。

「どことやっても　3点だなあ」

と笑うがスコアラー太田の評によれば「バックに声がない。キックが小さい。落ち着きがない。内村自分から声を出してパスをもらうこと。止ってプレーする事が多すぎる。バックにフリーでけらせすぎる。フォワードは軽卒なプレー

が目立つ。しかし全体としてはまあまあと言えよう。

3
2－0　1－0
0

▽準決勝（11月24日）

対慶応　ローン

わあデカイ。これが敵の第一印象である。特にCF・LIの二人は190cmにもたっしようかという大男である。10時半キックオフ。わあ腰がヨワイ。これが第二印象である。大男にありがちだが、彼等はコロコロところぶ、体勢がくずれる、腰がよわい。5分佐藤ズーッと興まで持っていって、飛び出して来たキーパーと派手にもつれる。ボールはひとり静かにコロコロ……ゴールイン！　一点を獲得だ。が、どちらも反則が多いことには驚くばかりだ。特に前半の11分から30分の間には個のフリーキックが集中している。二分間に一本強。これは栄光はヘッディングなどで無理が要求されたことが大きい。この間の栄光の反則は全てチャージである。この時間では正面からぶつかるよりほかの方法を、まだ思いつかなかったのであろう。そうこうしている内にもうハーフタイムになった。

「キーパー出足がおそいよ。左の内村をもっと使おう。フォワードもう一歩のダッシュだ。」やかんの水を飲んで後半へそなえる。ほてった肌に秋風が心よい。

後半、4分渡辺からの強いパスを佐藤シュート。敵バックス懸命にクリアー、と思ったらバックのけったボールがキーパーの逆をついて、ゴールインした。労せずに二点目をとったわけである。これから栄光フォワードぐっと調子をあげる。栄光のバックスには気の毒だが、これからフォワードの記事ばかりつづく。　6分、RW渡辺こぼれて来た浮き球を、ペナルティエリアのはるか外から無謀とも思えるロングシュートをする。ボールは野球のカーブのようにグーッと落ちるとゴールの最上部につきささり、ネットが大きくゆれた。三点目。19分、栄光のキーパー青戸大きくけって球はハーフラインを越えた。村田ここから敵バックスをよせつけず大独走。あれよあれよという間に四点目である。28分、再び村田ドリブルから倒れながらクリーンシュート。ついに五点を奪取。そして、そのまま押し切った。

試合後、今年は鎌学が藤沢とやっている。ところが、アレアレ吉光を欠く鎌学「まけちゃったー」決勝は思いがけなくも藤沢とやることになった。

5
1－0
4－0
0

▼決勝（11月30日）

対藤沢　ローン

また土旺に決勝だ。イレブンは学校からタクシーでとばした。観客はサッカー部全員とOB10人ぐらい。ウェーバー先生、大木先生ウルフ先生もいらっしゃった。が不思議にこれに勝ったら大阪という緊張感がない。去年の教訓が活きている。

2時、キックオフ。この前の試合をみると藤沢は足のチームだ。走りまわり、根性でぶっかり、ワイワイと騒ぐチームだ。が、試合は意外にも　かなり一方的なものとなるのである。5分　渡辺、青山にバックパス。青山これをおとくいのドリブルからシュートして先取点をとる。ところがこれから入らない。後で佐藤は、「1点入れたらさあ行けると思って足がガクガクしちゃった」と語った。多くの者がそうだったらしく、中学生の弁当を食べながらの「必死の応援」にもかかわらず、前半はそのまま終了した。が、ここまでで栄光のシュート10本。藤沢0本。絶対に勝てる。

ハーフタイムには栄光の試合独特の風景が展開する。送手以外のほとんどはグラウンドにとびだして、わいわい騒ぎながら球をける。こちらではイレブンがまるくなって話している。ハーフラインでは審判が（関根氏）空をながめてくもり空だ。

後半、15分　相川FK。これが渡辺→吉田→村田とまわりゴールのすぐ横へ浸入してフワリとシュートする。ついに2点目。3点目は、佐藤のロビングを村田へヘッドでパス、これを吉田がするどいダッシュでとり、キーパーの逆をつくシュートで奮った。しかしこのすぐ後栄光にピンチが訪れた。敵RI小菅独走、GK青戸とびだすがかわされた。シュート！……がこの時"忠実なプレー"がモットーのRF青山カバーしてとびこむ。見事にはじきかえした。ファインプレーだ。26分にはまたもや村田気おちしたバックスをしりめにフリーでシュートして4点目を得た。ああ優勝だ。大阪だ。

4
1－0
3－0
0

エンセイ ジュンビ

13期 渡辺 浩

横浜 大阪

この大阪遠征という派手な行事のうらには多くの苦労があった。マネージャー(太田、渡辺)の日記を見てみよう。これから、遠征する時はこれを読んで欲しい。同じようなミスをしないように。スケジュールをたてて順序よくやるように。

11/30 藤沢に4−0で勝つ。優勝。大阪遠征決定。

12/1 新聞に報道される。神奈川新聞は写真入り。 朝日は黙殺。

12/2 朝礼でテング氏ほめる。

12/3 ディスカッション
全国大会の反省。遠征前の練習予定。……
大体一日出発に決定。

12/7 キップを手に入れることで騒ぐ。急行か。特急か。交通公社。指定券コネ。……
毎日新聞がメンバーの写真をとりにくるがユニフォームを家においてある者がいて、そろわないと例き断念。中村光世君のとった写真を持ち去る。

12/17 トーナメント、新聞に発表される。ただちに模造紙に書いて校内掲示板にはりだす。
校内募金のポスターも書いてこれもはりだす。

12/18 今日から練習開始(今日は学期末試験の最終日)
登校してみると募金のポスターがない。不思議に思っていると朝礼で「校友会から金がでることになったので、募金はとりやめる。」と発表。画用紙代九損。
栄光会会長浜口氏等の寄付を学校の意向によりことわりに行く。(浜口氏宅へ)

12/20 学割証明書交付を交渉。
生徒25人。コーチ佐藤氏(10期)

12/21 毎日新聞栄光遠征を大きく報道。中村光世君の先日渡した写真のる。
「週二回の練習。東郷監督語る。のびのびとした気風。等々。」
マネージャー主任、太田から

渡辺へ変る。
生徒16名が一日に、10名が二日に出発することに決定。
個人負担第一陣二五〇〇円
第二陣三二〇〇円

12/24 学割証明書が三枚足りないのに気づく。
29日に個人負担金を持って来るよう指示。

12/26 足りなかった学割証明書をもらいに行く。
夜、主将吉田君から電話、キップをはやめに買えと言われる。

12/27 キップを買うことにして、まず学校へ金をもらいに行く。
が、金額不足の為断念。

12/28 学校へ行き東郷先生から金をもらう。
予算検討。東郷先生のキップ代も学割として計算していたのを発見。また予想以上に金が集った為、第二陣の個人負担額を三〇〇〇円に変更。
OBへ旅館、日程を書いた葉書を出すことになり、ガリを切り、印刷へ回す。
横浜駅へキップを買いに行く。
平常なら横浜駅で東京↓大阪のキップを売るが、くれで忙しいからかんべんしてくれと言われ、横浜駅からのキップを買う。東京までの往復キップを買えばいいわけ。

12/29 印刷できた葉書をうけとり、あて名を書いて投函。(OB名簿がなくて右往左往。)

12/30 ボストン運動具店の主人が来る。ユニフォーム代を払う。
今日は練習の最終日。

12/31 練習後皆をあつめ、集合時間予定などを知らせる。(プリントをつくったが、キップを東京駅からのものとした計画の為、ほとんど変更。集合場所を横浜駅とする。)
金の持ち方に頭をひねる。(大金の為。)
12時就寝。

1/1 5時半起床。6時家を出る。
外は真暗。星がまたたいている。
皆より20分早く横浜駅へ着き東京への往復キップを買う。
佐藤(13期)が持参したミカン一箱を東京への車中に忘れる。10時東京発いこまに乗車。
東京駅へはやく着きすぎ、列の先頭。皆すわれる。列車は一路大阪へ。

全国大会

1回戦

栄 12GK 3 上
　 2CK 6
光 14FK 10 野

午後一時宿舎の美加佐荘を出る。午前中は送手達も皆ポーカーなどをして、試合など知らぬ気であったが、今は少し緊張しているようだ。南海電車から堺東駅で降り、バス。会場はまだ余りひらけていない所だ。見わたすかぎりの草原に、工場や住宅がポツンポツンとたっている。ゾロゾロと会場へ入っていく。しょぼい　グランドのまわりにパラパラと人がいる。これが　我が全国大会第一回戦の会場であった。

すでに上野は練習をしている。こちらもいそいで着換え練習を始める。寒い風が吹きぬけると、砂ぼこりがパァーッとまいあがる。六甲学院の生徒も数人見に来ている。「上野は何時間も前から練習やっているのに、栄光はなかなか来ないから心配したよ。」と言う。練習が続く。栄光イレブンは何か悲愴な感じがする。大豪傑にたちむかう初陣の若武者といった感じである。（上野は国体準優勝）

ホイッスル・ついに始まった・栄光は新調のライトグリーンのユニフォーム、上野は黄緑のシャツにきたならしい黄土色のパンツである。前半。押されている。敵の攻撃はLW阿波が中心である。阿波がドリブルで持ちこみ、青山がぬかれ、センタリング、CFかインナーがシュートというのが何回かつづく。特にCF釘田はゴール前でフリーになりながら、おしいシュートをする。アッ、今度は右すみへ強いシュート。青戸セイビング。取った、取った。次は右からの攻撃だ。ボレーで中央へ。青戸とった。がそれを敵FW蹴る。青戸ポロ・シュート。入った。しかしその時ホイッスルが鳴りひびいた。敵FWのGK青戸に対するチャージである。栄光辛くも無失点におさえている。が、このあとから栄光にも調子がでてきた。特に佐藤が好調だ。よくパスをカットする。あるいは敵がける寸前、パッと足を出してとる。そして、時々栄光FWもスッスッとパスを回して、敵ゴール前にせまる。まもってはバックス、懸命のアタッ

ク、スライディング。コーナーキック青戸ジャンプ、ひときわ高い。両手でパンチ。上野にいくぶんあせりが見えてきた。しかし、一人一人の技術でははるかに勝っている。せりあえばたいてい上野がとる。フェイントとヘッドがうまい。我がRW渡辺のセンタリングも敵バックスのヘッドで防がれ頭を越すことができない。

しかし栄光よくやっている。左からのコーナー。佐藤ぐっと後へしなってヘッド。球はギリギリでゴールをオーバーする。今度は村田CHをぬいて左すみへゴロのシュート。GKセイビングでからくも防ぐ。上野のあせりは、反則の多いこと、特にオフサイドトラップにすぐひっかかることからも、うかがえる。

やがてホイッスル。0−0のまま ハーフタイムである。先輩が言う。「いいぞ、いいぞ。勝てる。勝てる。」「後半はじまったらすぐ一点入れよう。」

秋山はいつの間にか、鼻血を出している。急いで救急箱を持って来て手当てする。

後半。上野の攻撃は一段と激しくなった。が、その方法は変化な。い。CFからのインナーへのパスをしばしばインナーがのがす。CFがその度に「バカヤロ」と叫ぶ。栄光は完全な守備体勢である。インナーも守りにかける比重が大きい。村田一人前線に出てパスをまっている。顔が緊張のためにひきしまっている。昨日の晩彼は「おれボールとったらもう死にものぐるいで走るよ」といっていた。

栄光のバックもよくがんばっている。戸田が懸命にスライディングする。秋山は口で息をして苦しそうだ。相川の白手袋が右往左往して例のひっかけるようなキックでけり出す。本部のテント内で話す声が聞える。「栄光善戦ですねえ」。RIのフリーシュートは青戸がとびだして胸にあてる。そして、ついにいれられたと思ったヘッディングシュート。その時、戸田ゴールライン上でジャンプ一番、ボレーキック。ボールは大きくはね返された。実に一人一人が十二分の力を発揮している。上野に点が入らないので 満場騒然としてきた。栄光勝てるか。

しかし28分。上野左からのコーナーキック。ゴールからかなり遠い所に落ち、RI小坂がもつ、栄

光バックがとびだす。すごい砂ぼこり。ゴール前で混戦。ゴール前1mでRI小坂体で球を一押しする。このボールだった。このボールはフワリと宙を飛び、力いっぱいのばされた青戸の手の先を通り過ぎて、ネットをゆらした。ゴールインである。遂に後半28分、上野の得点である。しかし栄光全然気おちせず、懸命の攻撃をする。渡辺とGKがもつれて、ボールがこぼれる。佐藤フリーでシュート。球はバーの上を飛び去った。なおも攻める。後半調子を出してきた福田もくわわって波状攻撃。入るぞ。がんばれ。しかし、もう時間がなくなった。そして、ホイッスル。

栄光はすばらしい試合をした。栄光の奮闘を見て、栄光の応援をしていた人々(観衆のほとんどだったン)が、拍手をおくっている。よい試合だった。

これで上野がまた準優勝でもしてくれれば、もっとよかったのだが。翌日上野は無名の宮城工に4−0で完敗した。

上野高メンバー

王崎	GK
林	B
田	B
本	H
井	H
内	H
坂	W
田	RI
井	CH
波	IW
児	GR
松	LR
藤	CL
松	LR
山	RC
増	CL
山	L
小	
釘	
松	
阿	

観客席

。この試合では戸田君の所によく球が来て、彼の芸技が見られたが、観客のオジサンか叫ぶ。

「ラッキーボ!イの三番ヤー。」

戸田君試合中なのに、そのオジサンに手をふったとか。

また上野CF釘田に反則のチャージした戸田君「すみません。」

釘田君曰く「そんなこというならはじめっからやんな。」

。金岡サッカー場をみてイレブン口々に「ひでえグラウンドだなあ。ぼくなんか、芝生でしかやったことがないからやりにくいなあ。」だってさ。

。上野のGK試合開始の時がなる

「さあ15−0、15−0。」

後半はじめに

「5−0で勝とう。5−0。」

しばらくして

「一点いれられたらことだぞ。」

一点いれたあと

「3−0、3−0。一点じゃはずかしいぞう。」

どこへ行こうだって大阪だあ!!

13期　戸田

一月一日（水）

曇り後晴れ、横浜駅東、午前七時集合

元旦の横浜駅はさみしかった。東京駅で急行宮島の列の後に並んだら、いこまの列の先頭になった。荷物を置く。場所を取って、まず一安心。この時になってはじめて気がついた。誰かがみかん一箱を横須賀線に忘れたとか。誰かがあわてて駅長室に行ったら、「正月そうそうおめでたいですな。」と言われたそうだ。勿論、急行いこまでは坐れた。後は平平凡凡な列車の旅。食べて、トランプをやって、寝る。起きればまた、食べてトランプをして、寝る。景色は静岡から名古屋まですこしも変りがない。あまり退屈なので、食堂車を見物、カレーライスが熱くてうまそうだった。名古屋を過ぎて京都へ近づくと、景色が少しづつ変った。山のふもとに白壁、黒瓦の農家が十数軒、その前に広い田。商店は見えない。人もめったに見かけない。渡辺浩君はここを「純然たる農村」といった。私は急にカタカナの世界から、ひらがなの世界へ連れ込まれたような気がした。大和、そんな感じだった。大阪着五分前になると、浩君がさっそくマネージャー振りを発揮して、用意のはさみで往復切符を切らせた。大阪着十七時二十五分。地下鉄に乗ろうと思ったら、南札口で切符を取られて驚いた。なんば駅下車。大阪でも有数の繁華街戎橋筋の雑沓を通って、旅館美加佐屋に着く。十八時半。

一月二日（木）晴れ

書初もせず、朝早くから出かける。大阪城を濠の外より見る。濠より眺めても天守閣はまだ遠く、朝霧にかすんで見ゆる。明星学園にて一時間の練習。午後レセプションに行く。舞台中央に大きく、全日本高校サッカー選手権大会交歓会と書いてあった。まず最初に神奈川県連盟会長香川氏の挨拶があった。その後、教育テレビスポーツ教室の映画を見て解散。この交換会に優勝旗を持って行ったのはよかったが処置に困った。そして、幕が上ると、舞台にはすでに他県

の優賞旗が並んでいた。しばらくすると舞台の端に栄光の制服を着た男の子が現れて、恥しそうに優賞旗をかざっていた。さて、レセプションの後は自由行動。このへんで少し気晴しをと思って、友達と歩き出したところ、行けども行けどもビルばかり。つまらないと言って、なんばに帰ったら、大変な人ごみだった。法善寺横町に行って、何を喰おうか、なんて言ってたら、いつのまにかタイムアップになっていた。一皿五十円のすし屋に入ったら、すごい勢いで皿を並べられた。驚ろいて、おじさんもういいよ、と言って飛び出した。みんな集ると、さっそく大阪漫歩の自慢話が始った。お好み焼を喰った奴、うどんを喰った奴、めおと善哉を一つずつ二人で分けて喰った奴、等々。六時頃　才二陣致着。

一月三日（金）曇り

開会式。「大阪の地名って仮名書きが多いな。」と私。相川答えて「そこが関西人の合理的なところさ。」会場はラフぼサッカーグランド。入ってみて驚ろいた。「芝生じゃねえぜ。」「そうさ、俺達日本一のグランドで試合してたんだぜ。なにしろ芝生だもんな。」開会式は長く待って、すぐに終った。スタンドの裏で入場を待っていたら、上野の連中がすぐ後ろに並んで、我々を栄光と気が付いて「五番てどれだい。あっ、お前かよろしく。」なんて、ノッポのがやっていた。へんなヘリコプターが飛んでるなと思ったら、急にスピーカーで「只今、ボールを投下いたしました。」と、放送。あわててコンクリートの壁に飛びついて中を見たら、ヘリコプターが飛び去る所だった。開会式で国旗掲揚の時はキャプテンが掲揚台の下に集合をした。式の後、才一回戦。浦和市立と延岡向洋。浦和は例の黄色いユニフォーム、延岡は真赤。向洋でなくて紅葉かと思った。浦和のバックスを見て気が付いた。浦和のバックスを見て気が付いた。ノントラップで逆へ蹴る。これで一応ピンチは切り抜けられるわけ。関根は、ダッシュしてよくアタックする。午後、練習。みんな、真剣に、真面目に、熱心にやった。なにしろ明日は試合だ。青戸君は特にしぼられた。

一月四日（土）曇り

午前中、練習なし。南海線で堺に行く。途中、通天閣を見る。歌に

は例いたが見るのは初めて。でもマリンタワーと大して変らないんで、がっかりした。音に例くと見る時とは、何事も変るものなり。（徒然草第七三段）さて、同じ電車に浦和市立の連中が乗り合わせた。「最後に上野の試合があるんだろう。相手はどこよ。」「栄光だよ。俺なんか。よろしく。」「栄光って、どこよ。」「知らねえな。」堺東駅下車。バスを待つ。五分、十分。自然と緊張してくるのが自分にもわかった。「上野なんてぶっとばしてやる。」相川は「興奪すんなよ。軽い気分だぜ」と言って平然としている。バスの中で黙っていたら、気持が沈んできた。キャラメルをかんで陽気になった。村田君の表情も堅かった。試合。ミーティング。誰もが上野とは実力の差があったのに、持てる力を十二分に発揮していた。特にバックスのプレーには目を見張らせるものがあった。と言ってくれた。大泉氏「あとの楽しみは、明日の新例だけだ。」みんなで佐藤晃一氏に二度お礼を言った。ところで、バックスが賞められたのは、この試合が初めてであった。自由時間。戒橋筋から心斎橋筋をぶらぶらと歩く。大阪の味、泥くさいものを食いたいというので、お好み焼き屋に入る。熱いのを急いで食べたので、味はよくわからなかった。この日、高橋がエドにノックダウンされた。二度目に立ち上ってレフリーに止められると、高橋はその場にくずれてしまった。この劇的なシーンを見て、青戸君は、朝礼のサッカー欄が小さくなるのではないかとしんぱいしていた。

一月五日（日）晴れ

神戸市の六甲学院を訪れる。六甲駅下車。駅からずっと急な登り坂徒歩十五分。慣れない者にはつらかった。六甲学院のグランドは段々畑のように三つに分れていて、一番下がサッカーグランドになっていた。親善試合。交歓会。この会で相川君の校歌独唱を初めて例いた。六甲生も不思議な調子で校歌を歌ってくれた。六甲生は栄光学園のことを色々例きたがった。交換会の後、新築の体育館と映画館のような講堂を案内してもらった。ここの庭には小径が小山を一廻りしていた。そこからは神戸の夜景が美しく、見渡せた。大阪発二一時二九分急行天竜にて満る。

喫煙室

○全国大会表彰式二題

神奈川サッカーの父イワブチ氏が挨拶した。氏は栄光のチームには〝緩急〟の〝緩〟がないといった。その時、福田君は首をかしげた。国語の勉強しろよ。

賞状、優勝旗授与が終って、今度は佐藤君が前にすすみ出た。彼は深くおじぎをして、手を出した。渡されたものは、旗立てであった。

○ドンチャラチーン

運動会に仮装行列で使ったたいこがそもそものはじまりだった。一人の調子者が部室のすみにつるしてそれをたたいた。ドンドンとなった。調子者はまだいた。彼はこわれた空気入れをつるした。チーンと澄んだ音がした。もう一人の調子者は水をいれたバケツをつるした。バシャバシャと音がした。もう一人の調子者、彼はこわれたくわの先をかなづちでたたいた。チンチンと大きな音がした。

調子者達はひまがあれば部室に集まって演奏会をひらいた。調子者バンザーイ!!

ドンドンチチチ、ドンチチチ

バシャバシャ　チーン

やがてテングさんが禁止を勧告した。―部室はしずかになった。

○「公告」

全国大会の予選決勝に栄光の応援に来ていた女の人は9期飯田さんの妹さんである。今回は戸田君のお友達ではない。念のため。

○これが現代っ子だ

今年も新入中一部員の顔合せ会が行われた。平均身長一メートル五十五センチ(推定)一人として

恥ずかしがる者はなく堂々と挨拶した。

「ぼくは全然欠点がないため、あだ名はありません。」

「ぼくは最初○○小学校にいましたが悪い学校なので転校しました。」

――宮内君(14期)はその○○小学校の○Bである。

「ぼくは△△といいます。でも高一の△△さんよりいい男です。」

等々……

○はやりことば

去年も今年もいろいろの言葉がはやった。その一部を紹介しよう。

ヤッパ。むろん言うまでもない。

面到みるよ。マネージー。ぼく帰る(大阪で)。スゴ丸。ドヒヤ丸。ドド丸。デケショー。ヨヨッ。デケスカネー。ゲスパニヨン。スケパーニョ。ハスレ。おろい。ギクッ。やだなー。オーノー。しあわせになれよ。まあね。ぼーんとーちーとも知らなかった。

○ぼくの初夢

大阪で見た佐藤君(13期)の初夢は「中尾ミエが障子をはっている」という夢であった。また相川君の夢は「東郷先生がポーカーの得点表をのぞいている」というもの。今年もあんまりいいことはないね。

○ショボクレ人生

ふらふらと夜の大阪に遊び出た13期の悪童達。大阪の味を味わおうという趣旨のもと、少しずつ食べ歩いた。その内訳は、タコ焼半人前。夫婦善哉半人前。おしずし4分の一人前。ギョーザ半人前。

○六甲学院呆然録

大阪遠征のB14期はそのあと、六甲学院を訪れた。

まず自己紹介。「私は日本タンメン友の会の理事です。」

「私は国際コカコーラー愛飲会の会長をしています。」

六甲の人。キョトン。

すばらしい講堂を見て「デケショー。」「ドヒャー。」と口々におどろきの叫び。

六甲の人。キョトン。

○哀愁列車

大阪からの帰りは、大阪駅11時35分発の夜行列車だった。まつこと四時間あまり。やっとのったら、超満員で四つのシートに14人がねなければならぬはめとなった。まず床に五人ねる。次にシートを一つとっぱらって、通路をこえて手すりにかけ、その上に二人ねる。残る座席に六人ねる。一人は立つ。そして最後の一人宮内君は席の背の上にすわる。(落ちない為に上からバンドを吊しそれにつかまる。) しめて十四人。網棚にねる等、いろいろ実験した結果これが最良ということで、採用したつめこみ法である。

○蹴婦連レポート

サッカー部の13期生のお母さん方は時々集まっては、親ボクを深めている(注：子供をダシに遊んでいるのだという説が有力)。その子供達が、つけた名前が蹴婦連(注：蹴婦連ではない)。その一員A君のお母さん、子供の試合が見たくなった。が、A君やだという。でも11月のある日、彼女は他の一員とともに、こっそり藤沢へのりこんで、A君の試合を見た。でもA君にみつからないように、大苦心。右へ左へとかくれながら我が子の勇姿を見て喜こんだとか。

ある晴れた日に母性愛の花がひらいたというオハナシであった。

○続、誰だ

先日行なわれた14期主将選挙において、13期相川君に一票が投ぜられた。落第を予想したのであろうという意見もあるが、タルンでいるのだという解釈が有力である。

○稼なき飛生

大阪での話、信者のX君がねる前にお祈りをしているのを見て、Y君がびっくり。「おい、あいつヨガやってるぜ。」

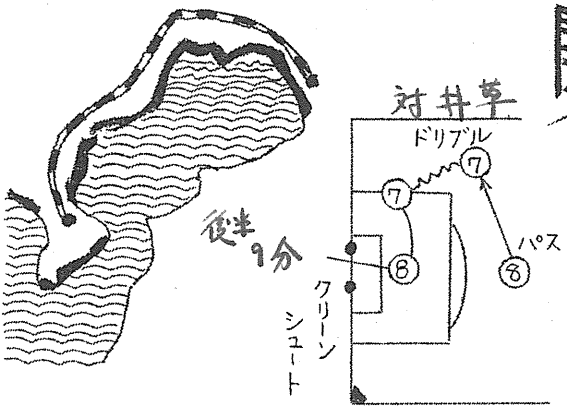
真面目なZ君、フトンにもぐってケンメイに笑いをおさえたそうな。

○信頼すべき筋からの情報によれば……

1月16日午後、13期渡辺浩君は凶弾によりガラスの破片をあびた。

訂正 右の記事中「凶弾により」は「部室の教壇」での誤まり。失礼をば。

関東大会



↓4期 新倉正和

地区予選

対県立鎌倉高校

五月十一日　於栄光

栄光 7 ― 0 県鎌
（4－0、3－0）

関東大会がいよいよ始まった。しかし、二回戦対小田高戦が六月に入ってから行なわれたので、試合前の気分は、後の試合程、盛り上りを見せなかった。

前半、RW渡辺の良い動きとファイトが目立ち、栄光　四点を上げてまずまずの出来。RW渡辺は、10分に、敵キーパーへのバックパスをダッシュでこれをカットして、そのままゴールにたたきこみ、21分には、ゴール前でLH相川からのパスを受けて、これを敵ゴール右スミに決める。なお、栄光は、17分RI佐藤が、23分CF村田が左スミと右スミに決めた。

後半に入って栄光は、4分に、内村の早いドリブルからのパスを受けたCF村田が少しドリブルしてミドルシュート、9分に同じCF村田が、栄光陣内からドリブル。敵バックスを次々に抜いて、四〜五十メートル走り　六点目を上げる。更に27分には、RW渡辺→RI佐藤と渡ったパスを最後にLI吉田が右側に回りこんで決め、勝敗を決った。

G.K	戸田
R.B	山田
L.B	青菅
R.H	青戸山
C.H	小秋
L.H	相川
R.W	渡辺(幸)
R.I	佐藤
C.F	村田
L.I	福田
L.W	内村

吉田

リーグ別・第一戦
対小田原高校

栄光 4 ― 1
3 ― 1
1 ― 0
小田高

昨年、前半一点を先行しながらも、後半に敵エースLW.力石に二点を入れられ、関東大会に出場できず無念の涙を飲んでから、一年、再び、小田高と戦える日を迎え、試合前の練習には、試合に対する意気込みが、ありありとうかがえる。

前半立ち上り、相手の出方を見ていた栄光は五分ごろから、敵ゴールを脅やかし始める。栄光は得意のパスワークで敵バックスをゆさぶり、16分ゴール前混戦から、ペナルティ・キックを得てCF.村田これを左上すみに決め、先取点。だが去年の例から見ても油断は禁物。後半五分位から終始敵陣内で試合を展開、八分敵ゴール・キックをRB青山、敵のエースLWとせり合いながらも、これをカット、ゴール前に絶好のロビングをあげれば、栄光フォワード、ゴール前に殺到これをおしこんで追加点。が選手の喜びもつかの間、直後に敵LWに得意の中距離シュートを鮮かに決められる。その後試合は互角。しかし再び活気を取り戻した栄光は25分にRW渡辺が、27分RI佐藤がいずれも、中盤からのパスをドリブルしてダメオシ点を上げた。

G.K	戸山
R.B	青田
L.B	青戸
R.H	小田
C.H	菅原
L.H	秋山
R.W	相川
R.I	渡辺
C.F	佐藤
L.I	村田
L.W	吉村

リーグ別・第二戦
対横浜商業高校（Y校）

栄光 1 ― 0
0 ― 0
0 Y校

Y校は、野性的な攻撃守備で栄光を苦しめたが、Y校の女性マネジャーは栄光でもすでに有名。TガンバッテネーLの金切り声をして、お姉さんづらしているのが、おもしろかった。

前半、ダッシュがすばらしいY校の元気ある攻撃に比べ、対小田高戦の試合の疲れのせいか、前日のさえ、活気が見られず、10分ごろまで、おされっぱなし。決定的と思われるピンチが続き、GK青戸がゴール前で後逸するなど、応援団もヒヤヒヤすること、数回、し

かし、その後栄光は元気、ダッシュを回復し、中盤では両軍とも良く動き、激しいボールの奪い合いが見られた。そして24分栄光は、フリーキックが、RH小菅からLW内村に渡り、内村がこれを中に返せば、RIが佐藤がこれを決め、やっと先取点。後半5分。ゴール前の直接フリーキックを外してから、栄光は逆に、Y校の鋭い攻撃にあって、ピンチが続くが、敵のオフサイドや反則があって、失点を免かれた。栄光をバックスその後落を着きをとり戻して、そのまま Y校を押し切った。

	戸山
	田菅
	山川
	辺藤
	田田
	村
	青育
	戸小
	秋相
	渡佐
	村吉
	内
G.K	
R.B	
L.B	
R.H	
C.H	
L.H	
R.W	
R.I	
C.F	
L.I	
L.W	

リーグ別ヤ三戦

対法政二高

栄光3（2－0）2 法政二高

これに勝てば、関東本大会に出場でき、千葉行きが決定するとあって、自信は充分あったが、それでもどこか落ち着かない。今までの何十日という苦しい練習が生きるか死ぬかか、このたった一試合にかかっている。

前半、栄光浮き足立つかのように見えたが、スタートからどんどん攻めまくる。自然と声も出る。先輩や応援団の力も、入る。パスも割り合い通るし、好調、そして7分、ついに右のコーナーキックを得て、これを押しこむ。しめた！栄光を応援していた誰もがそう思ったろう。続いて12分にもコーナーキックをものにする。再び、しめた！ 栄光強しと思った瞬間、球は栄光GK青戸を抜いて栄光ゴール内に転がっていた。栄光あっけない失点に少し動揺し、多少の不安を見せながら前半を終った。後半は、法政二高が捨て身の攻撃をかけるのに対し、栄光は落ち着いた攻守を見せ、20分、三たびコーナーキックをものにした。その後、法政二高の荒く鋭い攻撃に手を焼くが、失点を一点に食い止め、そのまま押し切った。出場決定!!

	戸山
	田菅
	山川
	辺藤
	田田
	村
	青育
	戸小
	秋相
	渡佐
	村吉
	内
G.K	
R.B	
L.B	
R.H	
C.H	
L.H	
R.W	
R.I	
C.F	
L.I	
L.W	

リーグ代表送（県の決勝）

対茅ヶ崎高校

栄光 2 (1－1) 3 茅ヶ崎高
(1－2)

予送の最終戦は県下の決勝。もうすでに関東大会出場は決定しているので、楽に試合に臨む。LI吉田、LH相川負傷の為、前半は十人で戦うこととなり、一番苦しい試合となった。4人のフォワードは右から攻め、前半ゴール前の混戦から、CFの位置にいたLW内村が鮮やかに決めめ一点以外は、終始おされ続けた。結局、主将LI吉田の負傷に意気をそがれた栄光は後半RI佐藤が二点目を上げただけに終り、逆に三点を取られ、敗北をきっした。

しかし、すでにこの前の試合で、法政二高を破って関東大会出場を決めている栄光にとって、この敗北は、欠点が痛切にわかり、よい教訓となった。関東大会は一学期か終ってから始まるが、それまで一ヶ月間あるので、今までの予送で反省すべきところを先輩方の指導で改め、関東大会で自分の持てる力をフルに発揮して、我々の今までの目的、先輩方の念願を達成しよう。関東大会への出場が決定した現在、今まで厳しいが暖かい指導をして下さった先輩の方々に感謝したい。

相川　福田

G.K	戸山
R.B	田菅
L.B	山田
R.H	青戸
C.H	青小
L.H	秋辺
R.W	福藤
R.I	渡田
C.F	佐田
L.I	村吉
L.W	内村

関東高校サッカー千葉大会

一回戦　七月二十三日。四時。

対井草高校（東京代表）

千葉へ来てから二日目、二十三日に、我々は一回戦に東京代表の井草高校と対戦した、三時ごろ、朝開会式の行なわれた千葉高校のグランドを来て見ると、前の試合が行なわれていて、我々の意気を刺激した。あのこげ茶色のグランドに白い球が転っていると、いっそうファイトがわいてくる。練習を軽く終えて、一息ついていると、応援にかけつけてくれた人達の顔が見え、栄光イレブンを心強くした。先輩の、敵の練習の偵察によると、井草チームは、インナーを中心とした強力なFWを持ち、決

して侮れる相手ではないということが、わかり、二回戦以降の事は考えずにこの一戦に全力を注いでぶつかった。

前半十分まで栄光フォワード得意のパス・ワークで敵ゴールを脅やかすが、ゴール前で敵バックスの強い当りでくずれ、得点機までに至らない。さすがに、一県を勝ち抜いてきただけあって、井草も強い。その後、栄光井草共に五分五分に組み合い、中盤は敵インナーによって取られ、栄光バックスをかきまわされ始める。再三ピンチが続く。ついに二十八分、真中よりにいた敵LWが栄光RHのマークをふり切って、左側から切り込み右に流せば敵RWこれを得点して、栄光一点リードされたまま、前半を終る。

後半に入って再び五分五分に闘いを進めるが、三分栄光RI佐藤からのパスを、RW渡辺少し持って再びゴール前にゴロで返すところ、RI佐藤、キーパーの足元を抜いてクリーンシュート。やった！待望の同点。やっとパスが成功した。イレブンも汗と土で真黒になった体をだき合って喜ぶ。栄光、調子にのって押し気味に試合を進め追加点をねらうが、中盤の主導権を九分通り取られてはいかんともし難く、二十分敵右からのコーナーキックを栄光キーパー、バックスよくはね返したが、こぼれ球を敵RHに右スミに中距離シュートを決められ、栄光バックスの気落したところ、二十五分にはゴール前混戦からついに押しこめられ二点リードされた。その後ますます栄光動きが鈍くなり、遂に一点も返せずに、タイム・アップ。

夜、旅館での反省会で、国体予選を足がかりに全国大会をねらうには、バックの増強、充実を一段と進めるとともに、県外にでも充分通じるようなフォワードを作らなければならないことを自覚して、全国大会への決意を固めた。

栄光 1 ─ 0 ─ 1 ─ 1 ─ 2 ─ 3 井草

戸山田田山川辺藤田田村
青青戸福秋相渡佐村吉内

KBBHHHWIFIW
GRLRCLRRCLL

関東大会余談

13期　青山

ダッシュに関東大会のことを書くように言われたがもう半年近くたってしまって大分記憶がうすれているので抜けてしまう事もあるだろうと思う。その点はお許し願いたいと思う。では横浜に集まったところからだんだんとたどって書いて行くことにする。

重い荷物を引っ下げて横浜駅に着いた・が・皆の集まっているところがみつからず表に出てしまったが誰もいない。仕方なく荷物を置いて中の方に這入って行った。そうしたら僕の出て来た改札口と違う出口に太田君等がいるではないか。目が悪いと困ることが多い。とにかく皆と一緒になれたが落ちついてみると少々体がだるい。前日までの練習がきつかったのか体のしんの方の疲れがとれてない感じがする。予定時間より遅れて例の如く相川が姿を現わし全部揃った。先輩は石原　大泉　佐藤の三氏。先生は東郷さん。ワンちゃんのお母さんと相川のお母さんが見送りに来てくれた。それから病後で白くふくれたワンちゃんが顔を見せた。出発。京浜東北で秋葉原まで行くのだそうだ。早くも佐藤は国語の宿題を始めた。盛んに人々に例き回っている様子はこっけいというかあわれと言うか。秋葉原で総武線に乗り替え。電車及び駅は大分混んでいた。千葉まで立っていたのでもとから疲れていたのがよけいに変になった・千葉駅を出ると何か大きな看板がある。関東大会云々と書いてあったが文句は忘れた。駅から旅館まで5分とか言っていたが重い荷物で大分疲れた。宿った所は窓から見えるのが屋根ばかりでしかもギョウザ屋と天ぷら屋が隣りでは喜ぶのはジョージだけ。僕達は余り嬉しくなかった。その日は千葉医大とかで軽く練習。途中で浦和市立に会いグランドの反対側で練習していたのが浦和西であった。少々差をつけられた感じ。夜コーチ連から井草のことを例いた。調子によっ

ては勝てそうな感じがする。その後僕達は二階でタッシュ等読んでいたが高一や佐藤達はテレビを見ていたようである。これは後で例いたことだがその日の夜中一緒に泊った夫婦が夜釣りから帰った子供のことでケンカしていたそうである。そのお陰で太田君達は眠れなかったとか。僕は何も知らずに寝ていた。次の日試合当日は三時頃まで旅館でゴロゴロ。少年サンデーか何か買って来た奴がいて皆で読んだ。そこの便所が又ものすごい臭いなのでとても入る気がせず、デパートへトレパンとシャツといういでたちで出かけたが少々恥かしくはあった。他の奴等もそうとう閉口していたらしい。あの臭いは今思い出してもゾッとする。そうこうするうちに試合の時間となって千葉高へ出かけた。いろんな学校がいたが皆強そうに見えて仕方がなかった。茅ヶ崎が応援してくれた。試合内容は外に書く人がいるはずだから省略する。何となく負けて又旅館へ帰る。今覚えているのはテントの所で飲んだ粉ジュースの味だけである。夜反省会。固体への態度やこれからの練習で気を付ける点等を例いて終り。その夜は試合が終ったせいか気楽で楽しく過ごした。費用が余ったので五百円づつ返してくれて一番喜んだのは相川。うれしくて眠れなかったとか。次の朝浦和市立と城北の試合を見た。浦和の一点がインチキだ。城北の勝だとか何とか文句を言いながら帰って来たがその浦和市立が優勝したのだから泣くに泣けないのが城北である。城北の健闘は大したものであった。それから解散。僕は福田達とサイダーとラーメンで昼食を取りそのまま帰った。吉田達は映画。新井は日劇へ行ったとか行かなかったとか。

それから今思い出したが入場式の車を忘れていた。試合のあった日の午前中のことである。写真等もあったから特別に書くこともない。

スポ大中の教室で書いているので回りが騒がしくて変な文へちゃんとして書いても大して変化ないがいになった。その上ボンヤリした記憶だから事実と違ったところもあるかと思う。大体のムードと経過を伝えた。

終り

私は思う

石原慎太郎

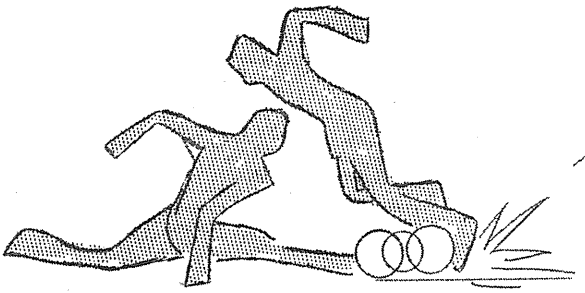
＝朝日新聞より要約＝

サッカーという競技はこの世で最も天才的なスポーツと私は信じる。天才的という意味は真の熟達には天才がいりこのすばらしい試合は芸術に近いほどの美しさと感動があるということだ。

野蛮な野球とスポーツとしては下等なゴルフが幅をきかせている日本では、私がいくらそれを周囲に説いてもさっぱり通用しない。ゴルフと野球にうつつをぬかしているのは、アメリカ崇拝の色ますます濃い日本とアメリカそのものぐらいで、世界中他のどこの国へいってもサッカーの人気はすごいものだと説明しても話にならない。結局この日本ではそれを実際にやってみたことのある少数のしあわせな人間達だけがサッカーの醍醐味について知っているということになる。という現状だから日本サッカーの現状はお寒いものでやっと最近クラマー氏のようなすぐれたコーチのおかげでどうにか先が見えて来たというところだ。しかし、日本のサッカー界の現状は私の如きサッカーに一種信仰的愛着を持つ人間にはいかにも情ない。

一向にうだつの上がらぬ日本のサッカーに絶望しかけていたころ私は本場のブラジルで世界一といわれるCFペレの試合ぶりを見て目をさまされた。それはかねがね私がサッカーに関して抱いていた所信をみごとに裏書きしてくれた。人間技ではないという表現は簡単だが誤っている。なぜなら、私が目にしたものは正しく人間の競技だったのだから。つまりそれは人間の考え造り出したものの間でもっとも崇高に美しいもの、感動的なるもの、すなわち芸術に似て近かった。私自身が、一人の選手として抱いていたサッカーへの願望を、ペレーがはじめて満たしてみせてくれたのだ。目を閉じると、今でもまぶたの間に鮮やかな緑の芝の上を強い紫色のユニホームに身をつつみ、純白のボールを追う彼の姿が浮んでくる。

それは人間が人間として持った肉体のマキシマム（限界）を完全にきわめつくした、一種現実にみる伝説にも似た光景だった。



国体

神奈川県予選　　13期 太田忠彦

新人戦、関東大会に希望通りの成果をおさめた高校は次のタイトル国体出場権を目ざし、異例のベストメンバーで出場、見事に成功した。

一回戦　不戦勝

二回戦（八月十九日）

対相模工業　雨

7
5－0　2－0
0

雨のしとしとふるローンで練習につづき試合が開始された。敵相工の応援五十人に栄光も奮気一発エンジンのかかりも早く無難な出足。5分にRB青山のショートパスをうけたRW渡辺が二人抜いてドリブル・クリーンシュートを決め先行。つづいて9分敵バックのトリッピングによってPKを得、渡辺が右上に決めた。その後攻めたてながら決め手がなく前半終了。

後半開始4分RH大橋のパスをうけたRW渡辺のシュートがポストにあたりはね返るところをCF福田がみごとに蹴り込んだ。ついで6分に混戦からこぼれたボールをLI吉田8分にはRI佐藤のパスをうけたLW内村、10分には再び佐藤のパスをうけたLI吉田が中央をドリブルで突破右側にとそれぞれ加点していった。中盤に入って無理なシュート、巧名にはやったシュートがふえ決らなくなったものの、22分には吉田のヘッドパスをうけた佐藤がク点目をワントラップシュートで左にたたき込んだ。楽な試合ではあったが高一の進歩を物がたる有意義なものであった。

三回戦（八月二十日）晴れ

対慶応

3 (0－0 / 3－0) 0

前日まで猛烈なトレーニングをしてきた慶応はさすがにうまかった。前半互いにCFを中心に攻め合い0－0で終了。後半も好試合を展開。ところが時がたつにつれて慶応に疲れが目立ち、栄光フォワードのパスが回りはじめた。11分前日休んだCF村田のパスをRW渡辺が走り込みキーパーを抜いてなんなく先取点。13分RI佐藤のたてパスぎみのロビングをCF村田うまく走り込み、真中高目にシュートして二点。ますます動きの悪くなった敵バックスの背中をRW渡辺→CF村田→LW内村とロングパスが通り最後に内村が20分にロングシュートを決めてダメをおした。その後慶応も中央の三人で何度も突破をはかり成功、シュートをするがバックスの好守で辛うじて失点を防ぎ、試合終了。

準決勝（八月二十二日）

対神奈川工業　晴

6 (3－0 / 3－0) 0

前半15分頃まで神工RW、CFの二人を中心に栄光陣内奥深くまで攻め込み栄光苦戦。しかし18分LH相川が混戦から大きくけり出したボールをRI佐藤が再び大きなロビングを放ち、CF村田がマークをはずしみごとにゴールした頃から神工が守り気味になり、24分30分には内村と吉田のパスをうけた村田が数米ドリブルしてそれぞれ決めた。後半に入って神工すっかり元気がなくなり栄光フォワードのロングパスがぐるぐる回り出した。12分には、中央に回り込んで来たRW渡辺のたてパスをうけたRI佐藤がマークを外しうまくゴール四点目をあげた。つづいて23分には、この日調子にのるCF村田がLW内村→LI吉田→CF村田→RW渡辺と回ったボールを再びパスをうけペナルティエリア外からミドルシュートみごと中央を破り自ら四点、5－0とした。又、終了近く29分にはセンターライン近くからRI佐藤→LI吉田→LW内村と回った球が中央に折り返され、またまたCF村田が長いドリブルの後右隅にきめ全員を狂喜させた。一試合五点は何年ぶりかのタイ記録である。そして全体からみてもパスがうまく回り、無駄なストップのないきれいな試合

で決勝に進んだ。

決勝（八月二十四日）

対鎌倉学園　晴

3
0 1 1 1 1 0
1 1 1 1 2
1 0 0 2
え

八月の初めからの練習の成果がついにここで現れた。宿敵鎌学に延長のすえねばり勝ったのである。

前半、鎌学はRW辻、CF吉水、LI星野を中心に左右真中と、手をかえ品をかえて攻めかけ、中盤ではおされ通しであったが、そのすきをついてか16分RW渡辺のパスをうけた佐藤がウイングの位置に走り込みセンタリング。それを中央につめていたLI吉田がキーパーの逆をついてクリーンシュート劣勢を一挽に挽回した。ところが鎌学もハーフの活躍で大いに奮気。その後も一進一退の決勝戦らしい好勝負を展開、前半を終了した。

後半に入って鎌学一気に攻めこみ3分にはLW三枝木のパスをうけたCF吉水がウイングの位置からゴールラインぞいに中央までドリブル難なくゴールを決め同点と追いつかれてしまった。その後両軍激しくぶつかり合い　絶好のチャンスをのがしながら試合は進行したが、17分鎌学ゴール前の混戦からのこぼれ球をRI佐藤がRH福田にバックパス、福田それをワントラップの後シュート。混戦をぬって左隅にみごとに入った。ところがそのすぐ後、19分にはRW辻のパスが横にうまく通りCF吉水が再び中央を割ってペナルティ・マーク付近からクリーンシュート再度同点に持ちこまれた。そして後半終了まで、味方バックスのキック力のなさも手伝って混戦のまま。ところが、延長に入るや、スタミナのない栄光は早く決めようと終始攻め込み9分にはLW内村が持ち込みシュートを放った球がキーパーにはじかれたところをフォワード全員がつっこんで結局CF村田が勝ちこし点をけり込んだ。その後鎌学の気力もなくなり、そのままホイッスル。ついに初の国体出場権を得た。

しかし、試合後香川さんの話にあったように、学校の事情で、鎌学に出場権を譲ることにし、無念の涙をのんだ。全国大会を目指すことにして……。

国体へ行かれない事

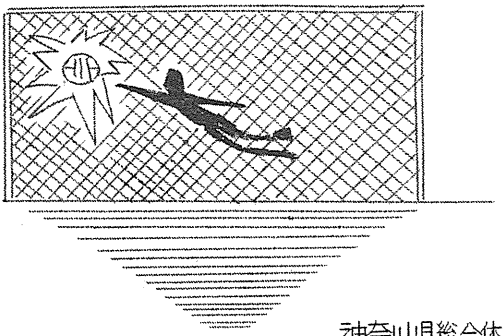
13才 青少

結論として一番馬鹿を見たのは送手であった。優勝して喜んだのもつかの間、彼等は現実的なもの大部分を失ってしまった。彰状とカップの返却されてしまった今彼等に残されたものはその記憶とスコアブックだけなのである。この事に関して今だに思い出して文句を言っているものがいるから学校の言い分を大体のところ記してみる。

決勝戦の後田畑・太田・佐藤(晃)の三先輩と東郷先生のところへ行った。次の日には永島・石原・佐藤(晃)の三先輩と生徒の方は吉田・佐藤(純)と僕の三人であった。二回の話しを総合すると大体次のようになる。少くなくとも三日なり四日なりの間サッカー部の生徒だけ授業を休むことは学校の方針に反する。つまり他の生徒と本人達への影響を考えて学校としてそれは良くないと判断するであろうと言うのである。"あろう"をさらに説明すれば学校の考えは職員会議、校長及び父兄の意見を総合して決定されるがその時は夏休みであったので父兄会や職員会議を開くことは不可能であった。そこで校長が今までの方針に従えば水戸行きを許可することはできない。とこのような事であった。もちろんこの間に校長と先輩の意見の交換が行なわれてこちらの意向は充分に解っていただけたはずであるが、それを考えに入れても校長としては前記の方針に従って許可できないと言うことなのである。

先輩はもちろんできるだけの事をしてくれたし又我々は全力を尽して決勝に勝ったから文句はない。校長としても校長の立場としてはあれ以外に取るべき道はなかったであろうと思う。皆が出来るだけの事をして何故このような結果に終ったか。それを論ずる紙面が今ないが、いつか同様の事が起った時に又、考えてみても良いと思う。今回は帰納的に体得されるべき人生の一経験ーすべての人が全力を尽してもうまく行くとは限らないーとして記憶にとどめておきたいと思う。

神奈川総合



神奈川県総合体育大会　14期 福田 昭紀

一回戦対希望ヶ丘

栄光 0－0 希望ヶ丘
（2－0）

今日のメンバーは、俗にいう二軍現K1主体の新チームである。ぶっつけ本番の試合だけにきわめてオソマツなプレーを展開。一方の希望ヶ丘もペースをくるわされたように、調子を合わせてオソマツなことをやってくれる。まわりを見ると、見物人も、応援する気がわかないようでねむたそうな顔と顔。凡戦をくりひろげている間にハーフタイム。ここで負けては、栄光の名誉にかかわるというわけで、K2が重い腰をあげて出陣。FWにK2を加えたからといって急に、いいプレーが見られるわけではなく、凡戦がつづく。しかし、だてに、サッカーをやっていたのではなかったらしく、RW渡辺、RI佐藤が一点ずつを入れてかろうじて勝つ。

二回戦対県鎌。十月というのに異常な寒気。大粒の大雨。やる者見る者、誰にとっても気に入るような天気ではなく、紳士的なスポーツ、サッカーを満足にプレーできるような状態ではなかった。悪天候が原因か、気が入っていないのか、だれた試合。見る者を興奮させてくれず、奥歯ガタガタいわせるもの多勢。K一だけの无発メンバーは、一回戦以来、進歩の跡が見られず、FWの非力は、特に目につく。前半、もちろん無失点ついでに無得点。後半は、残念ながらも、先輩(K2)の力をちょっと借り、敵GKがボールとたわむれて

いる所に、FWが、おちょっかいをしてボールをゴールに入れてやり得点。バックの健闘で勝利を握る。

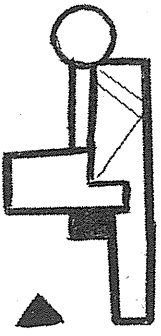
栄光 0－0 県鎌
1－0

三回戦対神工　栄光 0－0 神工
0－1

〈メンバー〉川倉沢菅内橋木田井藤村
GK 吉
RB 新
LB 赤
RH 小
CH 内
LH 大
RW 笠
RI 福
CF 新
LI 佐
LW 内

普通の大会では中盤戦という、こうなのに、はや決勝戦。K2は自由参加とあって、数人がハッパをかけに登場。なにがなんでもK一だけでやるとあって、K一のイレブンは少々あがり気味。ハーフラインに集まったとき、神工のデッカイCF曰く「見なれない奴ばっかりだなァー。二軍とは、ばかにしているなァー」。今まで、栄光にいためつけられてばかりの神工は、ファイトまるだし。栄光もファイトマンRW笠木通称デンチを中心に猛ハッスル。しかし、両チーム、ネジが一個なくなっているらしく、歯車がうまくあわず、前半は、三試合連続、0－0の珍記録を達成。後半の前半、栄光のFW、敵ゴール前でがんばるが、キビシサがなくゴールをわる事ができない。足をいためたにもかかわらず、RWデンチが、好センターリングをした。遂に得点かと思った瞬間、CF新井、何を血迷ったか、ボールをゴール一メートル位前でコンバート。後半の中頃から、神工がだんだんと押し返して来、右CKを例のデッカイCFがしょぼしょぼと決め、逃きられてしまった。

今大会は、FWにK二を補充しただけで、K一の力を見るのに絶好のチャンスだった。中学時代も、優勝という、名から見離された、14期としては、是非ともいいところを見せたかったにちがいなかった。しかし、吾から決定力のなかったFWは、依然もとのままで、K一による得点はついにみられなかった。一方のバックスは、一点の失点におさえ、かなりの健闘をしめした。13期が劣のすばらしかった学年だっただけに、14期のFWにいま一歩の努力が期待される。



さっかあぶ

今の高三（十二期）が中一の時高三は七期生だった。その七期生が中一の時の高三が二期生。その一年先輩の一期生によって、わがサッカー部は創立された。そんな大昔の話を、昔のダッシュから、しのんでみよう。

四期の泉頭氏は次のように書いている。

「創立者であり　初代主将だったのが佐野碩さんだったが、この人は創立の為に随分人知れぬ苦心をされたと思う。僕達は下級生だったから、なにも知らなかったがこんなことを言っておられた。『俺は校長の所へ何回もいってようやく部を創立する許可を得たが、次に校外試合となるとなかなか許してくれなかった』

色白の厳しい顔立ちの小柄な佐野さんだったが、その闘志は素晴らしいものだった。練習中又は試合中に僕達を叱りとばす時、又はCHとして縦横に走りまわってアタックする時、何かきついものを感じたものだ。僕達は創立時代にあっては、ただ、佐野さんを信頼する外はなかった。皆、佐野さんに引っぱられていたのだ。

蹴球部の骨組――小規模だが堅い――は、佐野さんによって築かれたと思う。創立の焔は、この青白い鋭い焔だった。」

その頃のグランドは

「当時のグランドは、タッチラインが山側にそって取ってあり、今のを90度位回転させた位置にあった。ゴールというと、丸太棒を三本組んで釘で無雑作にぶっつけて出来ており、灰色のペンキが塗ってあった。後にバーは折れて縄の時もあったし、ゴールもしまいには或る尻の大きい奴がプッシングの時へし折ってしまった。」

五期の川喜田氏は

「グランドが今のと直角であった頃の話、その頃中一であった私には、理由が分らなかったがグランドのりんかくに溝を掘った。きっと草がはえすぎてラインが分らなかったからであろう。良く掘った。その頃の練習は必ずこの溝堀りが付き物であった。」

そしてこのグランドとも、今年でおわかれである。ああ。

十五期サンバレ

十三期　渡辺幸男

今になって、あれやこれやと反省してみたところで何にもならないが、私の失敗を、これから指導にあたる人々が二度とくり返さないよういくらかでも参考になったら幸いと筆をとった次第でございます。又、十五期の諸君には多少なりとも、これを読んでこんな時もあったのだなあと、ふりかえり、反省し、三度も同じ失敗をしないように。

私が、十五期の指導をうけもったのが、63/。若かった私には、煮えたぎる情熱と、多くの抱負がありました。しかし、指導していくうちに、何度か、これらも砕けかかたっし、投げ出したくもなった。"笛吹けどおどらず"まさに、その通りなのである。まるで張合がない。何でサッカーをやっているのだかわからない。おつきあいでやっているんだと言わんばかりだ。技術は、と言えば知れたものよくまあここまで無駄めしを食ってきたものだとあきれ驚いた。

どこから手をつけたらいいのか若い私には、とんと解らなかった。

いろ〳〵考えたあげく、まず彼等の中に、裸の自分をとけこませていった。その結果、ある幣害、へ威厳に欠けた〳〵はでたが、まずまず成功したと思う。

次に、情熱に燃えていた私は、個人の技量を無視し、チームプレーへと先走ってしまった。それが夏の大会わ一回戦敗退どいう惨めな結果を生んでいる。結局ここから導かれる事は、中Ⅱの3学期、中Ⅲになっての1学期間のほとんどは、徹底的な基礎技術と、体力

増強の為に、使うべきである。少しでもこの期間を短くする為には、中Ⅰ、中Ⅱの間に、基礎の基礎を、正確にマスターさせなければならない。この時代につけた技術が、以後の各自の、サッカー生活を、支配するということも、わからせる必要がある。

こうして始まった、私の指導生活も、春休みの練習で、一応軌道に乗り出した。彼等にも、中学の最上級だという自覚が、多少ながら現われ、まとまりのきびしさも見えてきた。その頃、私は口をすっぱくして、「早く一個のチームになれ」と怒鳴った。確かに、怒鳴るだけではどうしようもない。十何人の、性格も、意見も、ちがう人間の集まりである。一つになれと言っても無理承知のことである。しかし、君達は何のためにサッカー部に入ったのだ。「好きだからだ」と皆答える。嫌いなバカはいないだろう。それなら、サッカーをやっている間だけでも、自分の利己心を捨て、皆心を一つにする事はできないのか。私としても、もっと君達と話し合う時間が欲しかった。

彼等も、中Ⅲとなり　体も冬先から比べると、一まわりも二まわりも大きくなった。それに従ってキックも力強く、速いシュートが射てるようになってきたが、その他の、トラップ、ヘッドへは、まあよい〉ドリブルなど、試合に必要なものが、まるでできていなかったし、チームプレーも、勿論の事、未熟であった。しかし、その頃まで消化した練習試合には、少差ながら、全試合にふしぎに勝っていた。これが更に、彼等を天狗にし、私すらも、強いのだと信じさせる結果になってしまった。

このように、精神的にも、技術的にも未熟のうちに、夏の大会を迎えたのであった。

二学期になって、私は、その練習の半分以上を基礎技術の為に、費した。長い眼でみて、彼等が高校に入って困らない程度の技術をつけさせたかった事と、その単調な練習に堪えるだけの精神力を、養わせたかったからである。これはかなり成功したと思う。〈但し前にも述べた通り、これからは、こんな事は一学期までに完成させてもらいたい〉

この結果といえるかどうかわからないが、序々に彼等にも安定した

強みがでてきた。事実、練習試合には、又勝ち続けた。

しかし又も、県大会の予選決勝戦で、実力下位と思われる三崎に破れたのである。私は、この試合を見ていないのでよく解らないが、まだ彼等には何かが欠けていたのだ。その前の二試合には大勝していた。

この時も、君達は楽な気持で敗戦を見送り、県大会一本に命をかけた。

一回戦対真鶴、実に君達はよく戦った。過去一年を振返って、よくここまで成長したものだと、私の目を見はらせ、喜ばせた。相手は非常に強かった。チーム的には栄光は一歩譲ったであろう。しかし君達は先取点を奪われながら勝利のみを目標にイレブンが心を一つにして戦い、延長の末、勝利を握った。この試合こそ、君達がこれから高校でプレーして行く上に、忘れてはならない多くの教えを残していると思う。

しかし、これから三日後、君達は又も腐敗をなめた。対一中戦、けっして、栄光よりは強くない。敗けたのだから、何も言えないが試合内容から言っても、敗ける試合ではなかった。六ー四から、七ー三で栄光が押していて、つまらない点を与えて破れた。結局、この大会は、あの一中が優勝している。ここでも、やはり何かが欠けていたのだ。何かとはなんだ！君達にはもう解っているだろう。〝精神力〟〝勝負根情〟に欠けていたのだ。勿論それだけではないが。〝根情〟とは、口で言ってつくものではない、厳しい練習に堪え、自己に打ち勝つ事によって、ついてくるものだ。

今はもう、これらの敗戦については、君達は、君達なりに反省し、これからの高校時代への大きな夢に胸をふくらましているだろう。

最後に一言、〝君達が、今まで通り抜けて来た艱難を土台にし、二度と過ちを犯さず、限りなく進歩のあらん事を望む〟

つけくわえると、〝勝利、それは、艱難を乗り越えてからの事である〟

今度は、本当に最後、中Ⅲの指導者は、徹底的にしぼってやれ、若いんだから、他の中学は毎年、ぐん〳〵強くなってきている。もた〳〵すると栄光の名は、県サッカー界から消えるぞ。

中学

夏の大会

15期 吉田伸二

7月22日、朝だというのにムンムンする程の暑さだった。支度を終えてサイド、シューティングとやるが足がすくんでなかなかうまくけれない。そうこうしている内に、試合開始のホイッスルがなった。「相手は市場だ。よわいぜ、6-0位でいこう。」と誰かが叫んだ。

試合が開始した。こちらがもたもたして、まだ動けないうちに、市場は全力でせめてきた。あっという間にゴール右はじにシュートをきめられてしまった。これでさっきの元気はどこへやら、一しゅんみんな、がっかりしたようだがすぐ元気をとりもどした。そしてこの前から調子にのっていたRW木下が同点シュートをきめた。そしてすかさずもう一点追加して2-1とし前半をおえた。後半、一点リードのためかバックスに気のゆるみが見えて、まもなく、敵LHの主将らしいやつがCHの頭をこえてドリブル。キーパー一人になった所へ、きれいにシュートを決め、遂に同点にされた。ここで両チーム共、気迫が高まり一進一退のゲームとなった。15分頃RW木下のセンターリングをLI吉田サイドでゴールをねらうと、ゴロのゆるいシュートがゴール左はじに入りやっとの事で3-2とした。ここでもう勝ったと思った。しかしあと一分か二分という時、又前と同じように敵LHがCH野口の頭をやぶり独走　バックスの追撃むなしく同点とされてしまった。その後五分五分の延長があったが両チームとも暑さと疲労のため動けず得点なし、ついに延長も終わり3-3で引きわけ　そしてクジ引となり敗れた。

ここに栄光はじまって以来初めての大会一回戦敗退という記録をつくってしまった。主な敗因は、相手をあなどり、たかをくくった事、又、気力がなくチームとしてのまとまりがなかった事などがあげられると思う。それさえあれば、必ず勝てた試合だったと思う。

―終り―

中学

冬の大会

15期　菅野谷

今年は例年と違い、本大会の前に地区予戦（送？）が行なわれた。もっとも一回戦に勝てば本大会に出られるというものである。栄光が組入れられたのは、三浦横須賀鎌倉逗子地区。十月に舞岡と試合して勝ったので少々自信をつけ夏の大会の雪辱を期して、中学最後の練習を行った。

《地区予戦》―出場9校

▽　一回戦（対武山）

於栄光　十一月三日

○栄光 7（2－0、5－0）0 武山●

球なれで栄光がぐっとまさり中盤の8割をキープ。敵がボールをこわがっているので終始栄光ペースで試合を続ける。FWはCFが両インナーにはたきシュートするという手でかなり効果をあげている。バックにはあまり球がまわらなく後半にはバック転じて声掛け専問となった。ともかく久し振りの大勝で、三浦半島地区代表四校のひとつになることができた。

▽　二回戦（対逗子）

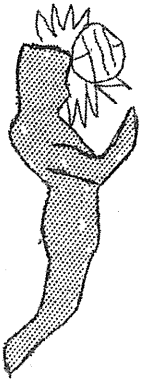
於栄光　11月10日

○栄光 8（3－0、5－0）0 逗子●

敵はファイトがありすぎるというか、ともかくくだけていうとヨタったチームであった。ガスが欠場したが小寺が充分穴を埋めた。彼はよい意味でのFW万能選手である。ウイングやハーフが案外とよいロビングをあげて、相手を考えての？プレイをした。望月のプレイが光り矢内氏も前半のみの出場ではあったが、やたらとがんばった。なにしろ相手がだれているので試合をやっていてもおもしろくなかったような次第。

（一、二回戦のメンバー）

	辻	
GK	沢	菅
RB	間	小
LB	村	寺
RH	脇	泉
CH	沢	望
LH	谷	月
RW	口	吉
RI	下	伊
CF	月	矢
LI	木	茂
LW	内	望
	吹	野
	田	梅
	原	滝
	寺	中
	菅	相



▽　決勝（対三崎）

於栄光　11月24日

●栄光0（0－0、0－2）2三崎○

決勝の相手は大船中とばかりおもっていたら三崎中であった。14期が楽勝しているのでたかをくくっていたらどうしてどうして。栄光は敵陣深く持込むが、強力なCHLBにはばまれて決定的なものがない。後半もよくハッスルはしたがせり合いに負け。だんだん分が悪くなってくる。後半17分頃ちょうど敵RWにわたった球が滝脇のカット及ばずRIにパス、シュートされた。キーパーよく飛出して防いだが再びゴール前の混戦からシュートされ、球はキーパーの右をぬいてゴールイン。時間が少なくなったのでバックスもあかり気味で攻撃する。30分をしばらく過ぎた頃マークのうすかった敵LIがドリブルして中距離シュート、キーパー防いだとみえたが、球が飛びあがったキーパーの手を後にぬけて二点目をとられた。かくてそのままタイムアップ。始めての無得点試合。バックスが菅谷の負傷でふだんとちょっとメンバーなど違って不利な点もあったがフォワードのせり合いの強さ、バックスの惑のあるプレーが望まれる試合であった。なおこのあと大船中との練習試合に2対0で勝ち面目を保った。

	辻
GK	沢
RB	相
LB	滝
RH	梅
CH	中
LH	野
RW	小
RI	望
CF	伊
LI	矢
LW	吉
	脇
	沢
	村
	口
	寺
	月
	吹
	内
	田
	原
	菅

『本大会Ⅰ』出場32校

▽一回戦（対真鶴）

於湘南高グ12月22日

○栄光2（0－0、1－1、1－1、0－0）1真鶴

真鶴（県西地区一位）は部内の下馬評にたがわず相当の強豪であった。敵のキックアンドラッシュに悩まされながらも一進一退のうちに前半を終了。後半10分CH菅谷のカットした後、インナー、ハーフのフォローが悪く敵LWに突込まれて一点を献上。今さらながらに夏の大会のことが思い出された。このまま敵に押し切られたのでは何とも15期の顔が立たない。バックスも必死の気持で球を蹴りかえす。20

分頃、カッパが彼のいう科学的サッカーの理論でLIの位置に飛びだした。カッパの中継でLWガスにわたった球が大きく中にもどされるところをCF矢内がプッシュ。ネットの動くのを見て勝ったように嬉しかった。しかしそのまま点がはいらず一回戦から延長に突入。後の話が尻切れトンボになるが、要するに一点取って勝った。栄光の粘りが功を奏し、ファイトによって勝った試合だった。

辻　沢村沢谷口下寺内田原
相中梅菅野木小矢吉菅
GK RB LB RH CH LH RW RI CF LI LW

▽二回戦（対関東大浦）同日同会場

○栄光 3（2－0、1－0）0 ○関東

相手はLW（13期佐藤さんの弟）を際いてあまりうまい奴がいない。梅沢がハーフラインをちょっと出たところから射ったものすごいロングシュートなどで3点をとった。栄光は前試合にくらべやや動きが鈍ったが、余力のある試合ぶりで順調に勝利を収めた。

辻　村脇沢沢谷口下寺月内吹田原
中滝相梅菅野木小望矢伊吉菅
GK RB LB RH CH LH RW RI CF LI LW

▽三回戦（対藤沢一中）
於藤沢ローン12月25日

○栄光 0（0－0、0－1）1 一中 0

老いたりといえども一中は強豪。RI LIを中心にスピードのある攻めをみせた。前半互角。バックもぽかぽかシュートされるが、実力に比した好カバーで得点を許さない。後半同じような調子の試合が続くがCF矢内の不調が目立ちシュートことごとくはずれる。ク分一中RWのロビングをとったLIに相沢があたりそこね入れられてしまった。それ以上追加点は許さなかったのだが栄光にいわゆる根性がなく負けた。夏の大会、冬の大会と完敗したが、僕達15期のために栄光サッカー部の威信地に落ちたりといわれないよう高校で頑張らなければならない。最後に、終始僕達の面倒を見てくれた幸男氏はじめ、先輩　先生方に感謝します。

辻　沢村沢谷口下月内田原
相中梅菅野木望矢吉菅
GK RB LB RH CH LH RW RI CF LI LW

練習試合あれこれ

春休み練習の五日目、我々にとって初めての国際試合をする。十一時半桜木町に集合し、山手のジョゼフにおしかけると、三時からだと門前払をくう。そのため一時解散し、二時間以上もあたりをブラつく。再び集った時は、港の見える公園やマリンタワーへ行ったうまいギョウザを食ったと遠足のような気分だった。

校内ではみな英語を使っているのでボロ出さないようにしていると、日本語で話してきたのでひと安心。一試合目は十四期を中心としてあたったが、相手はノッポや毛色の変ったのが多く、我々よりはるかに大きい。ボールは、栄光陣内だけにあって失点が増すばかり、そのたび屋上から口吹の応援をうるさいほどする。我々はコンビもとてなくスイスイぬかれ相手にならない。相手のハーフの動きがよく、次の一軍とはどんなものかと思っているうち、三十分ハーフで九対〇で負けた。二試合目は栄光十三期のベストメンバーを出したら、相手は、マンボズボンをはいたのや、百キロデブが出場。閉いておどろくには、前回のが大阪の明星と二対一で敗れた一軍だとか。前半はデフに蹴飛ばされながらも四対〇とリードしたが、後半オールメンバーを先の一軍と交替して対抗してきた。たちまち逆転され、結果五対四で敗れた。

完全に実力の差であったが、その彼らも、全国大会には出ているが優勝した事がないらしい明星に敗れている。栄光も全国ではまだまだと思い知らされた。お湯のシャワーを借りてから、寄宿舎の食堂を横目でにらみながら、貽くなった山手を下った。こんな試合も毎年一度くらいはしたいもんだ。

（赤沢）

鎌学に敗れる

国体予選に備えての夏季練習の中頃八月十三日、ほこりの高く舞い上る栄光グラウンドに鎌学を迎えた。関東大会終了後国体予選もベストで臨むと決定した為、この日は前半高一を数人出して対戦した。栄光のキックオフで始ったがすぐ蹴り返され、その後一方的におされた。特に高一が緊張してしまい、キック力のないバックスに余計に負担をかけ、ミスを重ねていった。開始十五分間CH渡辺の奮戦で持ちこたえたものの、19分に

は、CF吉水のセンタリングを突込んできたRW辻に何なくヘッドで決められてしまった。そして25分RW辻にLB戸田が抜かれ絶好のセンタリングを許し、中央にいたRI田中に見事シュートされてしまった。26分にも一点目と同じケースで、RW辻にプッシュで加点された。特にマークの甘い事とキック力の不足が大きな失点を招いていた。後半主力の出場でいくらかもり返しRW渡辺の独走で一点返したものの焼石に水であった。

対防衛大学、二学期に入って九月二十八日土曜日、授業終了後、運動会の用意に忙しい校内をスルリと抜け出した栄光蹴球部約四十名（含中学）は相変らず風当りの強い、見るからに税金で建てました言わんばかりの設備を持った馬堀海岸の上、小原台に防衛大の挑戦を受けて堂々乗り込んだ。試合は佐藤さん（10期）、菅原（15期）の特別出場でオール栄光として対戦四ラウンズを行い4ースで快勝？した。試合後招いて下さったOB林さん（9期）に連れられ、豪華な？PX（食堂）で防大の方々と交歓会を行い、大いに入学するよう誘われた。それぞれ満足するまで食べて六時頃、横浜から東京の光まで見える小原台から暗くなった空の下を下っていった。

対鎌学
メンバー

GK	菅
RB	山
LB	川
RHB	辺
CHB	小
LHB	秋
RWI	相
CFI	渡
LW	
RW	青
RCF	青
LCF	戸
RI	中
CI	渡
LI	大
RW	笠
CF	福
LW	佐
RHB	吉
CHB	内
LHB	
RB	戸
LB	田
GK	村

サッカー部に入って

17期 前中 裕

僕が一年生仮入部の時にサッカー部を選んだ理由は、僕にもわからない。兄貴がサッカー部にいたころ十人も二十人も仲間をつれてきたり、部の話をきかされたりして、いつか僕の入る部はサッカー部と決まってしまった。

母は僕のサッカー部入部について反対であった。練習がきびしいので成績が下ったり、体をこわしたりはしないかと心配だったのだ。しかし、兄貴やその他の先輩の方々の助言でとうとう母も承知した。

さて、入部して最初の練習日は嵐の前日で雨が降っていた。風も吹いていて練習日としては決していい日ではなかった。

運動場に出て最初に体操、みんなで声をかけて、それがおわるとランニングである。次第に足がかたくなって、上へ上ってこなくなる。地面がデコボコに波うって見える。ダッシュの時などは足はますます言うことをきかなくなる。指導の先輩の顔がニクラシく見えてくる。僕は走りながらこんなことをよく考える。

（僕はなんのためにこんなつらい練習をしているのだろう）そんな時、ふと隣のコートで練習している先輩を見ると　その答が出てくる。先輩達も、もっともっときびしい練習をしてきて、いまの県下一位の栄光を勝ちえたのだ。

そんなことを考えながら僕はモクモクと走る。その後の練習はぜんぜんつかれない。やがて日ぐれになり、太陽が沈むと、運動場のあちらこちらから　各部のいせいのよいかけ声があがり、紅に染った空にひびく。小と長浦湾を見ると、自衛艦に灯がともり、水にゆれている。今日もとうとう最後まで頑張った。

サッカー部を出るにあたり

12期　中川

「ダッシュ」の編集長が高三からいわゆる「想い出の記」のたぐいの文を受け取る時は、「今ごろこんなもの書いてるとは、この人一体勉強してんのかい。」と思い、又「まあ頁数をうめるには手頃な所だ。」と思うものである。ぼくもとうとうそう思われる所まで落ちに落ちたかと思うと、ふと寂しくなるし、又サッカー部がたまらなくなつかしくなるのである。

ある時人気(ひとけ)のない中学校舎でふとバトミントン部室にまよいこんだぼくは、いつものくせでその日誌をのぞき見した。そこには『どんな部になりたいか』という題のディスカッションの記録があった。

"サッカー部のような良い雰囲気の部になりたい。" これを見てぼくは「やっぱり」と思った。一歩はなれて見るサッカー部というものは本当に素晴らしい。君達の想像を越えている。先輩が暇を見てはせっせと片田舎の栄光サッカー部を訪れるのを見てもわかるだろう。うらやましい程いい部なのだ。

ぼくは高二の終りまで、つまり実質的な部活をやっている間、もちろんサッカー部をいい部だと思っていた。しかし又苦しいこともやたらと多かった。むしろ時には楽しいことより苦しいことの方がはるかに多かった。どのようなことが苦しかったか一々グチをこぼして年寄り扱いされるのは、若さの盛りにあって青春を謳歌しているぼくには耐え難いことであるからここでは避けたい。しかし君達も又楽しいことばかりではないはずだ。脱落したくなる程苦しい時さえあるだろう。しかし才三者にはその事自体が美しく尊く見えるのだ。君達は今もちろんサッカー部をいい部だと思っているだろう。しかし実際にはそれ以上にもっともっといい部なのだ。この事は是非一度考えて欲しい。

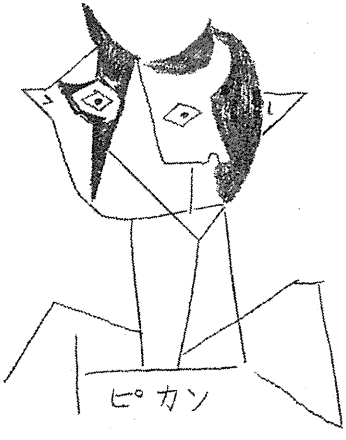
それにしても昨年はよく勝った。高三が見ていて全くひがみたくなるような勝ち方であった。全国大会出場が決定した時は、高三も調子に乗って私設応援団を組織し

大学して大阪に来り込もうということになった。所が威勢かいいのは最初だけということは世のならいで、一人二人と抜けて行く様子はあたかも秋の枯葉のごとく、或は天狗の髪の毛のごとく、結局行ったのはトン平一人であった。かといって勉強するわけでもなく、こたつにあたって紅白歌合戦を見るか、みかんの食べ過ぎで手の平や眼玉を黄色くするのが関の山、何ともお粗末であった。全くわけのわからないのは高三という学年であるが、それだけに余計部活動をやっていた頃はよかったなと感ずる。近ごろ余り立ち寄らなくなった部室からこぼれてくる笑い声を耳にする時、雨の中での練習にはげむ君達の姿をまのあたりにする時、ぼくはふとベストを尽くさなかったことへの後悔の念に襲われるのである。サッカー部のよさをはっきり認識できなかったことが惜しまれるのである。

この拙文をしたためているころもう十四期の新幹部も決まっている。華やかだった十三期の時代は終って十四期の時代が始まる。そしてやがて、今は高三をあわれみの気持で見ている十三期諸君も同じ運命となり、そしてその時は十五期生の時代となる。こうしてサッカー部はどんどん新しく変っていくが、今のサッカー部のもつよさというものは変らず続いていくような気がする。このよさはぼくが入部した時から、今まで変らずに続いている。そして今の部員諸君を見ても、それはいつまでも続くような気がするのである。

こんどサッカー部のOBとなる人々

伊東一雄　RH
伊藤勝昭　RB　大きい方
越智信利　LW　Oが太い人
佐藤孜　GK　ムーチン
末田勝利　RI　四万十＝マンジュー
中川謙　RH　前編集長
成宮隆夫　CF
栗山東平　LH　住所＝栗山
樋口淳　CH
星野崇　LB　カイジン



クラブ紹介

始めに

黄色いユニフォームに青いパンツ、黄色と青のストッキングをはきグランドを走りまわる異様な集団を見かけたでしょう。それが我が栄光サッカー部の十七期部員達なのです。彼らは総勢二十一名・十四期の中一時代を髣髴とさせるものがあります。がこの人数のせいか私達は一向に彼等の名前を憶えることができません。そこで今回は彼等の顔…は一寸無理かな、せめて名前とどんな男か位は解かるようここに紹介してみようと思います。

新井宗孝　横浜　青木小
押本俊明　大津　清泉
堀越良治　横浜　蒔田小
角皆茂樹　横浜　下田小

趣味　サッカー

内藤幸一郎　鎌倉　深沢小
萩原英男　逗子　聖マリア
梅津光生　横浜　付属鎌倉
田口秀明　横浜　西前小
宍倉義治　横浜　東台小
丸物正直　横浜　本町小
中前　裕　横浜　立野小

趣味　「仕事です。」

井上譲治　横浜　御成小(鎌倉)

趣味　模型

鈴木久仁　川崎　平間小

趣味　読書、レコード鑑賞etc

永守平親　横須賀　豊島小

趣味　読書

磯野順幸　横浜　間門小

趣味　切手

殿内　力　横浜　浅間台小

趣味　古銭　刀剣数収集

野中哲男　川崎　宮前小

趣味　模型とラジオ

矢沢敬幸　川崎　洗足学園

趣味　読書

三村直士　逗子　広島市吉田小

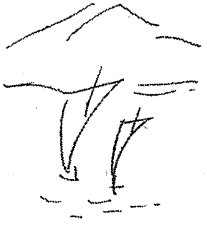
趣味　模型

金田泰明　鎌倉　付属鎌倉

サイクリング、モノポリ、音楽鑑賞

大田辰男　横須賀　豊島小

趣味　読書



成績

	月	日	会場	相手校	種類	得失点	勝敗
1	1	19	保土ケ谷	岩崎中	練習試合	4－0	○
2	〃		〃	六角橋中	〃	4－0	○
3	4	4	栄光グ	金沢中	〃	7－1	○
4	4	6	舞岡中グ	舞岡中	〃	2－0	○
5	4	29	一中グ	藤沢一中	〃	8－1	○
6	6	16	栄光グ	舞岡中	〃	1－3	●
7	7		保土ケ谷グ	松本中	夏季中学県大会	3－3	▲
8	9	8	大船中グ	大船中	練習試合	2－2	△
9	9	15	栄光グ	岩崎中	〃	2－0	○
10	10	19	舞岡グ	舞岡中	〃	4－1	○
11	11	3	栄光グ	武山中	中学県大会予選	7－0	○
12	11	10	〃	逗子中	〃	8－0	○
13	11	24	〃	三崎中	〃	0－2	●
14	〃		〃	大船中	練習試合	2－0	○
15	12	22	湘南高グ	真鶴中	中学県大会	2－1	○
16	12	22	〃	岡東六浦中	〃	3－0	○
17	12	25	藤沢グ	藤沢一中	〃(準々決勝)	0－1	●

17試合　得点-----59 ⟶ 平均 3.5

失点------15 ⟶ 平均 0.7

勝数 ── 12　敗数 ── 4（内一つは抽選敗け）

引分 ── 1

昭和38年 総合

2・3	藤沢	慶応	新人戦	3－1
2・10	〃	田南	〃	4－3
2・16	〃	Y技	〃	4－2
2・17	〃	湘南通信	〃	3－0
2・23	〃	鎌学	〃	3－1

	月日	会場	相手校	種類	得失点	勝敗
1	3.19	相手校	セント・ジョゼフ	練習試合	0－9	●
2	〃	〃	〃	〃	4－5	●
3	5.11	栄光グ	県立鎌倉	関東予選2回戦	7－0	○
4	6.8	藤沢ローン	小田原	〃 決勝リーグ	4－1	○
5	6.9	〃	Y校	〃 〃	1－0	○
6	6.16	〃	法政二	〃 〃	3－2	○
7	6.23	〃	茅ケ崎	〃 決勝	2－3	●
8	7.23	千葉高グ	井草	関東大会1回戦	1－3	●
9	8.13	栄光グ	鎌学	練習試合	1－3	●
10	8.19	藤沢ローン	相模工業	国体予選2回戦	7－0	○
11	8.20	〃	慶応	〃 3〃	3－0	○
12	8.22	〃	神奈川工業	〃 準決勝	6－0	○
13	8.24	〃	鎌学	〃 決勝	3－2	○
14	9.28	相手校	防大	練習試合	4－2	○
15	10.6	藤沢ローン	希望丘	神奈川総合1回戦	2－0	○
16	10.19	〃クレー	県立鎌倉	〃 2〃	1－0	○
17	10.20	〃ローン	神工	〃 3〃	0－1	●
18	11.10	〃クレー	緑ケ丘	全国予選2回戦	3－0	○
19	11.23	〃ローン	茅ケ崎	〃 3〃	3－0	○
20	11.24	〃ローン	慶応	準決勝	5－0	○
21	11.30	〃ローン	藤沢	決勝	4－0	○
22	1.4	堺鋼グ	上野(三重)	全国大会1回戦	0－1	●
23	1.5	相手校	六甲	親善試合	1－3	●

15勝8敗(0.65)　65－35
(平均 2.8－1.5)

ニュース トピックス

○

昭和三十八年度第一学期、学校の意向により、ダッシュの発行は一年一回と制限された。これによりダッシュは、試合報告雑誌としての色彩が強くなるだろうと予想された。このダッシュは如何？

○

毎長休み恒例の合宿は、食事提供施設が、不充分であるとされ、全面的に禁止された。その為我が部の合宿も行なわれなかった。

○

十月初め、十三期で、病後その他の理由でサッカーのできないサッカー部員により、サッカー部顧問評議会なるものが結成された。名称はいかめしいが、内容は雑役一手引受け所といったものであると見られている。十三期会員、太田、中村(光)、中村(文)、渡辺(浩)。十四期会員　新井、山本(稔)、山本(裕)。十一月九日には、ガリバンの機関誌「ピエレ」が発行された。これは写真入りでかなり充実したものであった。

○

さる十一月三〇日の全国大会県予選決勝には、多くのOBが応援にみえ、試合後の反省会ではいろいろの批評をしてくださった。(ただしほめた批評は一つもなかった)

○

冬休みのはじめさる料理屋でOB会がひらかれ、会計の送出その他を行った。

○

十二月三日午後、高校のディスカッションがひらかれ、全国大会の反省をはじめ、活発な討議が行われた。特に、中学生の自立性を高めるため、中学の主将を定めてはという意見が出、論議は白熱したが結論は出ず、一応みおくりとなった。

○

毎年恒例の十三期新年会は大阪遠征のため開かれなかった。他の期も、行わなかったもようである。

○

スクラップ係秋山昌(十三期)により、今年のスクラップ帳ができた。これは長年　案であったが実際につくられたのは初めてである。かアルバムはまたももちこされた。

TOPICS

大阪での自由時間、14期の悪童連が闇夜のなかにネオンの輝く、繁華街をきょときょとと歩いていた。浜ッ子のデンチャン、イカスジャンパーを着、〝文庫〟代表とばかりに肩を怒らして歩いていると、なすびのような顔したおねえちゃんと腕組みした、顔に傷のあるグレン隊風のアンちゃんにつき当られ、いいがかりをつけられた。それに答えてデンチ　グロテスクな顔を一層グロテスクにしてにらみかえした。その時、ミスターヤクザ氏、何を思い出したか一言、「兄貴、すまねー、許してくれ」。

ある日、藤沢県営グラウンドの帰り道、英国式くそまじめで有名な与太郎君、不覚にも自転車に二人乗りした。これを見たウシこと14期山本裕君、喜んだのなんの。それからことあるたびに「与太郎君、自転車に二人乗りしちゃいけないことわかってんべー。」としっこくいっていたそうな。

ペシブン

全国大会前の練習でコーチをして下さった十期の佐藤晃一氏にペシブンというあだ名がついた。これは練習中オッペシてブーンとするからだそうで。もっとも彼に言わせると、英語の知らない奴がパット、ブトンを読みまちがえたからだそうな。〔オッペス＝へ押圧すゝツイスト式に腰をふってチャージすること〕〔ブーン＝走りながら両腕をプロペラのごとく回転させること〕

二月一日にあった、栄光歩く大会で、十四期のサッカー部員は一、二の例外を除いてはあまり良い成績をおさめなかった。これは、前日の部活動がはげしかったことが原因しているのかも知れない。ともあれ、あとの方からのこのこと入ってきた14期吉川君、他の部の部員に「おめえらファイトがないな。」と言われてくやしまぎれにいわく「おれ達はファイトはあるけどやせがまんはできないんでね。」

編集後記

今年度は色々な面ではなやかであった。それぞれ一回戦で負けはしたが、関東大会、全国大会と出場し、国体予戦でも好成績をおさめた。これはエネルギッシュな十三期の力のあらわれであろう。

一方、十四期は静かだと言われている。が、それは内在する指導力を思わせるのではないだろうか。十三期に拍手を、十四期には敬礼をして迎えよう。

ところでダッシュだが、今までの14期の係だった新倉がキャプテンになってしまったので、あわてて後任を送んだ次第で……。なにしろずぶの素人が一週間あまりで山とある原稿を編集したのだから出来はよくないがごかんべんを。

（新井　高垣記）

みなさんご存じの通り学校より年二回以上の発行を禁止されたのでますます記録中心になってしまった。又、物価の上昇のためページ数に制限があり、（一万五千円で90ページのDASHが作れる良き時代があった。）後のためにも試合記録は載せねばならないので苦しいところだが、できるだけ楽しく読めるように努力したつもりである。

今号は、現在高二の13期があまりにも活躍したせいか、中学の影が薄いが、次号からはもっと中学のこともとり入れたい。みんな自分達の雑誌として、DASHをかわいがって下さい。

（赤沢記）

○ニュースでも知らせたように今年度からダッシュの発行は一年一回とされてしまった。それで63年中は私（渡辺浩）が原稿を集めた。三学期に入ってから、高垣、赤沢の両君にバトンタッチして、割り付けなどを頼んだ。私の意向とあわないで、内容がちぐはぐになったかもしれないが、堪忍してください。

○十三期が活躍しすぎたこともあって、このダッシュ中における試合記事の比率はかなり大きい。特に中学生には、つまらないかもしれないが、これは歴史に残るであろう一年の記録だから、真面目に、よく読みなさい。わかったか。

（渡辺記）

昭和三十九年二月二十五日印刷
昭和三十九年三月一日発行
栄光学園蹴球部
編集部
赤沢弘尚
高垣洋太郎
辻
中村
美術
新井正夫
笠井英文
顧問
濱辺港
梅川亮一（販売）
印刷　光有社（70）八〇八〇